Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2023 年度
研究活動報告書

龍谷大学世界仏教文化研究センター編 *2024.3*

RYUKOKU UNIVERSITY

Edited and Published by
Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2023 年度
研究活動報告書

序　　文

2023（令和 5 年）年度の「龍谷大学世界仏教文化研究センター研究活動報告書」をお届けします。2015 年（平成 27）年 4 月に開設された本センターは、本センターの理念を具体化する意図で設置された「アジア仏教文化研究センター」が 2020（令和 2）年 3 月末で私立大学戦略的基盤形成支援事業としての研究期間を終え、2020 年度からその事業活動を引き継ぐ形で再出発しました。

今年度も、国内・国外の講師を招いて、特別講演会や国際研究セミナーをはじめ、シンポジウム、フォーラム、ワークショップなど、45 件の研究事業を開催しました。このような充実した研究事業を展開できたことは、関係者の皆さんのご尽力の賜物と考えております。本センターの基礎研究部門、国際研究部門の研究活動の概要につきましては、本報告書「主要研究活動概要」をご覧ください。

応用研究部門付属研究センターである「人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター」の研究活動につきましては、別途報告書を作成しておりますので、本報告書には研究活動一覧のみ掲載しています。

また、本年度も『仏教文化研究叢書』、『世界仏教文化研究論叢』及び *Journal of World Buddhist Cultures*（『世界仏教文化研究』）を発行し、広く国内外に研究成果を発表しました。本研究センターが目指す仏教研究の国際的プラットホームの実現へ向けて確実に前進すべく関係者は総力をあげて努力を重ねていく所存です。これからも皆さまのご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

2024 年 3 月

センター長 脇田健一

2023 年度 研究活動報告書

目　次

序文 i
目次 iii

❖ 2023 年度研究活動一覧 ❖

世界仏教文化研究センター（RCWBC） 3
人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR） 19

❖ 主 要 研 究 活 動 概 要 ❖

＜シンポジウム＞

2023 年 5 月 20 日 ❖ シンポジウム ❖

「聖徳太子と真宗の文化遺産―秘伝・図像と信仰の世界―」 27

2023 年 12 月 14 日 ❖ 公開シンポジウム ❖

「世界で実践力を発揮している「お寺」」 30

＜講演会・研究セミナー＞

2023 年 4 月 7 日 ❖ 記念講演会 ❖

「**Retracing the Development of Early Buddha-nature Teaching in India**」 **34**

2023 年 4 月 8 日 ❖ ワークショップ ❖

「**The Ambiguous Status of the Mahāmeghasūtra as a Buddha-nature text**」 **39**

2023 年 4 月 20 日 ❖ 特別国際講演会 ❖

「**Eugène Burnouf and research on Indian Buddhism**」「**The prototype of the ancient ṛṣi and the constructed figure of the Buddha in dhyana**」 **43**

2023 年 4 月 30 日 ❖ 絵解きフォーラム ❖

「太子絵伝と絵解きの継承」 **47**

2023 年 5 月 15・22 日 ❖ 研究セミナー ❖

「「反省会」興亡史――草創期・拡充期・転換期・混乱期・衰滅期」 **51**

2023 年 5 月 22・23・26 日 ❖ 連続国際講演会 ❖

「**East Asian Buddhist Interactions: Focus on Greater Hangzhou Region Connections with Japan during the Song/Kamakura-Muromachi Periods**」 **54**

2023 年 5 月 25 日 ❖ 講演会 ❖

「菩薩の学びと自利・利他行」 **58**

2023 年 6 月 9 〜11 日 ❖ 国際ワークショップ ❖

「**The Eleventh Workshop on Tannishō Commentarial Materials**」 **61**

2023 年 6 月 20 日 ❖ 研究セミナー ❖

「瑜伽行派の経の修習法」 **65**

2023 年 6 月 21 日 ❖ 講演会 ❖

「**Travel writing and the Reconstruction of Buddhism: The Case of the Mahabodhi Journal (1909-1942)**」 **68**

2023 年 6 月 26 日 ❖ 研究セミナー ❖

「〔パネル展示〕仏教と災禍・病苦の近代史（解説）」 **72**

2023 年 7 月 19 日 ❖ 研究セミナー ❖

「寺院聖教の調査とその方法
—真宗・仏教研究者が古写本を活用するために—」 **75**

2023 年 7 月 19 日 ❖ 研究セミナー ❖

「酒生慧眼と高輪仏教大学歴史部の設置構想」 **78**

2023 年 7 月 21 日 ❖ コロキアム ❖

「**Admonitions from Ishiyama: A Reappraisal of Rennyo and the Reception and Role of Sacred Teachings Documents in the History of Shin Buddhism**」 **81**

2023 年 7 月 24 日 ❖ 講演会 ❖

「蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？：蝙蝠、仏教と東アジア宗教」 **85**

2023 年 8 月 29 日 ❖ 講演会 ❖

「国文学研究資料館における古典籍のデジタル化と公開
―大規模フロンティア事業の達成と展望―」 **88**

2023 年 9 月 14 日 ❖ ワークショップ ❖

「チベットの医学と仏教―歴史・思想・文献―」 **91**

2023 年 11 月 29 日 ❖ 研究セミナー ❖

「妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究」 **96**

2023 年 12 月 22 日 ❖ 国際研究セミナー ❖

「仏教におけるモノツクリの文化遺産―四天王寺の技芸文化をめぐって―」 **99**

2024 年 1 月 20 日 ❖ 調査報告会 ❖

「石山寺所蔵『浄土論』調査報告―『浄土論』諸本との関係を中心に―」 **105**

2024 年 2 月 16 日 ❖ 講演会 ❖

「荘厳経論と大乗荘厳経論」 **108**

2024 年 2 月 20 日 ❖ 記念講演会 ❖

「2022 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会」 111

2024 年 2 月 20 日 ❖ 研究会 ❖

「三業惑乱と香月院深励」 115

2024 年 2 月 21 日 ❖ 講演会 ❖

「仮名草子（合戦物）における宗教的説話について」 118

2024 年 3 月 1 日 ❖ 国際研究セミナー ❖

「デジタルヒューマニティーズ最前線 2024」 121

❖ その他 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター2023 年度研究体制 125

2023 年度
研究活動 一覧

世界仏教文化研究センター（RCWBC）2023 年度研究活動一覧表

❖　シンポジウム　❖

シンポジウム	
テーマ	聖徳太子と真宗の文化遺産――秘伝・図像と信仰の世界
開催日時	2023 年 5 月 20 日（土）13：30～17：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
プログラム	基調講演 「『聖徳太子絵伝』の秘事口伝―救世観音の転生と真宗―」 　吉原　浩人（早稲田大学教授） 基調報告 「１４世紀前半における真宗門徒の太子造像の諸相―遍在と偏在の問題をめぐって―」 　津田　徹英（青山学院大学教授） 「東国初期真宗と聖徳太子」 　西岡　芳文（上智大学教授） コメンテーター 　一本　崇之（大和文華館学芸員） 　村松　加奈子（龍谷ミュージアム准教授）
司　会	阿部　泰郎（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター JSPS 科研費基盤研究（A）「宗教テクスト文化遺産アーカイヴス創成学術共同体による相互理解知の共有」（22H00005）
協　力	龍谷ミュージアム
参加人数	92 名

公開シンポジウム	
テーマ	世界で実践力を発揮している「お寺」
開催日時	2023 年 12 月 14 日（木）13:30～16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 清和館３階ホール／YouTube ライブ配信
コーディネーター	葛野　洋明（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）
登壇者	清岡　隆文（元龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授、本願寺派布教使） ワンドラ　睦（浄土真宗本願寺派北米国仏教団オレンジ郡仏教会開教使） 土井　慶造（浄土真宗本願寺派南米教団ブラジリア本願寺開教使） 長岡　阿衣璃（実践真宗学研究科１年次生） 橋本　顕正氏（実践真宗学研究科３年次生）
主　催	龍谷大学大学院実践真宗学研究科
協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	50 名

❖　講 演 会・研 究 セ ミ ナ ー　❖

2021 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会	
テーマ	Retracing the Development of Early Buddha-nature Teaching in India （インド初期仏性思想展開過程の再検討）
開催日時	2023 年 4 月 7 日（金）15：15～16：45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）
講演者	Christopher V. Jones（Selwyn College, University of Cambridge）
コメンテーター	桂　紹隆（仏教伝道協会理事長（当時））
司　会	那須　英勝（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC） 公益財団法人　仏教伝道協会
参加人数	31 名

ワークショップ	
テーマ	The Ambiguous Status of the Mahāmeghasūtra as a Buddha-nature text （「仏性」を論じる仏典として『大雲経』（Mahāmeghasūtra）の曖昧さについて）
開催日時	2023 年 4 月 8 日（土）11：00～12：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講演者	Christopher V. Jones（Selwyn College, University of Cambridge）
司　会	那須　英勝（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	9 名

特別国際講演会

テーマ	講演 1: Eugène Burnouf and research on Indian Buddhism（ウジェーヌ・ビュルヌフとインド仏教の研究） 講演 2: The prototype of the ancient ṛṣi and the constructed figure of the Buddha in dhyana（古代インドにおけるリシ（聖仙）の原型とディヤーナする釈迦像）
開催日時	2023 年 4 月 20 日（木）15：00～17：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）
講演者	1: Kyong-Kon Kim (University of Strasbourg) 2: Guillaume Ducoeur (University of Strasbourg)
コンビナー	嵩　満也（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 国際研究部門
共　催	龍谷ミュージアム
参加人数	20 名

聖徳太子絵解きフォーラム	
テーマ	太子絵伝と絵解きの継承
開催日時	2023 年 4 月 30 日（日）13：30～17：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
講演者	①「聖徳太子絵伝」絵解き 瀧藤　康教（和宗総本山 四天王寺） 竹部　俊惠（井波 妙蓮寺） 齊藤　優華（南砺 真教寺） 椰野 明仁（三河すーぱー絵解き座 座長） ②特別講演 石井　公成（駒澤大学名誉教授）
司　会	阿部　泰郎（龍谷大学教授）
主　催	三菱財団人文科学研究 大型連携研究助成「地域と連携する宗教文化遺産の探査とアーカイヴス化による文化遺産と社会の創成」 JSPS 科研費基盤研究（A）「宗教テクスト文化遺産アーカイヴス創成学術共同体による相互理解知の共有」（22H00005）

協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター 龍谷ミュージアム
参加人数	94 名

研究セミナー	
テーマ	（1）「反省会」興亡史―草創期・拡充期 （2）「反省会」興亡史―転換期・混乱期・衰滅期
開催日時	（1）2023 年 5 月 15 日（月）17:15～18:45 （2）2023 年 5 月 22 日（月）17:15～18:45
開催場所	Google Meet によるオンライン開催
講　師	中西　直樹（龍谷大学教授）
司　会	近藤　俊太郎（龍谷大学非常勤講師）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 仏教史・真宗史総合研究班
参加人数	15 日（15 名）、22 日（14 名）

連続国際講演会	
テーマ	East Asian Buddhist Interactions: Focus on Greater Hangzhou Region Connections with Japan during the Song/Kamakura-Muromachi Periods （東アジア仏教の交流: 宋・鎌倉・室町時代に杭州圏と日本とのつながりを考察する）
開催日時	2023 年 5 月 22 日（月）、23 日（火）、26 日（金）（いずれも 18:30～20:00）
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室（22 日、26 日）、同清和館３階ホール（23 日）／オンライン開催（Zoom）
プログラム	5 月 22 日（月） From Ennin to Enni: A Tale of Two Capital Cities（圓仁から圓爾へ二都物語） Bernard Faure (Columbia University) 5 月 23 日（火） Myōshinji and Jingshan-si as seen in the works of Mujaku Dōchu（無著道忠の作品にみる妙心寺と徑山寺）

	John Jorgensen (Independent Scholar) 5 月 26 日（金） Gender and Dharma Lineage: Nuns in Korean Sŏn Buddhism（性と法系統：韓国禪宗仏教の尼僧） Jin Y. Park (American University)
司　会	嵩　満也（龍谷大学教授）
主　催	アリゾナ大学・龍谷大学・花園大学
共　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	22 日（52 名（内オンライン 2 名））、23 日（24 名（内オンライン 5 名））、26 日（23 名（内オンライン 4 名））

講演会	
テーマ	菩薩の学びと自利・利他行
開催日時	2023 年 5 月 25 日（木）13:30〜15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 本館２階講堂
講　師	若原　雄昭（龍谷大学名誉教授）
主　催	龍谷大學佛教學會
共　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 大蔵経総合研究班 龍谷学会
参加人数	156 名

真宗学会創立 100 周年記念連続講演会	
テーマ	これからの親鸞研究に向かって Towards Shinran Study in the future
開催日時	（1）2023 年 5 月 27 日（土）13:30〜15:00 （2）2023 年 6 月 16 日（金）15:15〜16:45 （3）2023 年 7 月 28 日（金）15:15〜16:45 （4）2023 年 10 月 13 日（金）15:15〜16:45 （5）2024 年 1 月 20 日（土）13:30〜15:00

開催場所	（1）～（4）：龍谷大学大宮学舎 清和館３階ホール （5）：龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
プログラム	（1）「「三願転入」再考」 藤田　正勝（京都大学名誉教授） （2）「親鸞が生きた時代」 平　雅行（大阪大学・京都先端科学大学名誉教授） （3）「日本仏教の社会倫理を考える」 島薗　進（大正大学客員教授・上智大学グリーフケア研究所客員所員・東京大学名誉教授） （4）「涅槃、仏性、浄土―仏教思想と現代思想を照らす親鸞の視座―」 下田　正弘（武蔵野大学教授・日本印度学仏教学会理事長） （5）「除かれる者たち―真宗他者論―」 杉岡　孝紀（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学真宗学会
後　援	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 親鸞浄土教総合研究班「真宗善本典籍研究」プロジェクト 六角仏教会「『教行証文類』の宗教的世界」研究グループ
参加人数	（1）81 名、（2）92 名、（3）50 名、（4）80 名、（5）28 名

国際ワークショップ	
テーマ	The Eleventh Workshop on *Tannishō* Commentarial Materials 第 11 回『歎異抄』註釈ワークショップ
開催日時	2023 年 6 月 9 日(金)～11 日（日）
開催場所	龍谷大学大宮学舎
プログラム	6 月 9 日（金） 10:00-11:00 Introduction, Discussion of the Aims of the Workshop 11:00-12:00 Small Group Translation Session 1 13:00-17:00 Small Group Translation Session 2 6 月 10 日（土） 10:00-12:00 Small Group Translation Session 3 13:00-17:00 Small Group Translation Session 4

	6 月 11 日（日） 10:00-12:00 Small Group Translation Session 5 13:00-15:00 Small Group Translation Session 6 15:00-16:30 Presentation of small group translations and plans for the next workshop
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC） 大谷大学真宗総合研究所 The Centers for Japanese Studies and Buddhist Studies at the University of California, Berkeley
参加人数	9 日（20 名）、10 日（22 名）、11 日（19 名）

研究セミナー	
テーマ	瑜伽行派の経の修習法
開催日時	2023 年 6 月 20 日（火）15：15～16：45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	小谷　信千代（大谷大学名誉教授）
コメンテーター	上野　隆平（龍谷大学講師）
司　会	佐々木　大悟（龍谷大学准教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」
参加人数	32 名

講演会	
テーマ	Travel Writing and the Reconstruction of Buddhism: The Case of the Mahabodhi Journal (1909-1942) （紀行文学と仏教の再構築: Mahabodhi Journal (1909-1942)）
開催日時	2023 年 6 月 21 日（水）17：00～18：30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 202 教室／オンライン開催（Zoom）

講演者	DI COSTANZO Thierry（Associate Prof., University of Strasbourg）
司　会	嵩　満也（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世仏センターエンゲイジドブッディズム研究会 科研費基盤研究(C)「明治期におけるトランスナショナルな日本仏教の諸相とその動向」（22K00088）
参加人数	7 名

研究セミナー	
テーマ	〔パネル展示〕仏教と災禍・病苦の近代史（解説）
開催日時	2023 年 6 月 26 日（月）17:15～18:15
開催場所	Google Meet によるオンライン開催
講　師	中西　直樹（龍谷大学教授）
司　会	近藤　俊太郎（龍谷大学非常勤講師）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 仏教史・真宗史総合研究班
参加人数	12 名

研究セミナー	
テーマ	寺院聖教の調査とその方法 ―真宗・仏教研究者が古写本を活用するために―
開催日時	2023 年 7 月 19 日（水）17：00～18：30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	野呂　靖（龍谷大学 准教授）
司　会	内田　准心（龍谷大学准教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」
参加人数	25 名

研究セミナー	
テーマ	酒生慧眼と高輪仏教大学歴史部の設置構想
開催日時	2023 年 7 月 19 日（水）17:15～18:45
開催場所	Google Meet によるオンライン開催
講　師	中西　直樹（龍谷大学教授）
司　会	近藤　俊太郎（龍谷大学非常勤講師）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 仏教史・真宗史総合研究班
参加人数	17 名

コロキアム	
テーマ	Admonitions from Ishiyama: A Reappraisal of Rennyo and the Reception and Role of Sacred Teachings Documents in the History of Shin Buddhism （石山からの戒め: 真宗史における蓮如と聖教の受容及び役割の再評価に向けて）
開催日時	2023 年 7 月 21 日（金）17:00～18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）
講演者	George Keyworth（Asso. Prof. University of Saskatchewan）
司　会	嵩　満也（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター　国際研究部門
参加人数	9 名

講演会	
テーマ	蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？：蝙蝠、仏教と東アジア宗教
開催日時	2023 年 7 月 24 日（月）15:15～16:45

開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	James Robson（ハーバード大学教授）
司　会	能仁　正顕（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター・龍谷大學佛教學會・龍谷学会
参加人数	23 名

講演会	
テーマ	国文学研究資料館における古典籍のデジタル化と公開 ―大規模フロンティア事業の達成と展望―
開催日時	2023 年 8 月 29 日（火）14:00～15:40
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 301 教室
講　師	入口　敦志（国文学研究資料館教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 古典籍総合資料研究班 「龍谷大学大宮図書館所蔵近世勧化本選集の作成をめざす研究」
参加人数	21 名

第５回 日中チベット学ワークショップ	
テーマ	チベットの医学と仏教―歴史・思想・文献―
開催日時	2023 年 9 月 14 日（木）9:15～12:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
プログラム	1.「ツォンカパの『大乗荘厳経論』における幻喩の解釈」 浅井　教祥（龍谷大学大学院） 2.「『中辺分別論釈疏』再校訂に関する試論―第 I 章「相品」を中心に―」 北山　祐誓（龍谷大学非常勤講師） 3.「チベット医薬の理論と実践（藏医理论与实践）」 仲格嘉（中国蔵学研究センター北京藏医院・研究員） 4.「清代北京におけるチベット医薬の伝播と発展について（浅谈藏医药在清代北京的传播与发展）」

	羅布扎西（中国蔵学研究センター医薬研究所・研究員） 5.「木刻版の《四部医典》について（《四部医典》木刻本研究）」 次旺邊覺（中国蔵学研究センター科研オフィス国際処・副処長）
趣旨説明	能仁　正顕（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 大蔵経総合研究班
共　催	中国蔵学研究センター・龍谷学会
参加人数	21 名

研究セミナー	
テーマ	妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究
開催日時	2023 年 11 月 29 日（水）15:15～16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	金　炳坤（身延山大学教授）
司　会	上野　隆平（龍谷大学講師）
コメンテーター	辻本　俊郎（龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」
参加人数	20 名

国際研究セミナー	
テーマ	仏教におけるモノツクリの文化遺産―四天王寺の技芸文化をめぐって―
開催日時	2023 年 12 月 22 日（金）13:30～15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 本館２階講堂
講　師	講師１　ファビオ・ランベッリ氏（カルフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部教授） “Buddhism, Labor, and Traditional Professions: Some General Consideration”　仏教、労働、伝統職能―総合的な考察の試み 講師２　エレン・ヴァンフーテム氏（九州大学准教授）

	“The Construction of Temples and Government Buildings in the Eighth Century”　８世期における仏教寺院と政府関係建築の建設
コーディネーター	阿部　泰郎（龍谷大学教授・世界仏教文化研究センター兼任研究員）
コメンテーター	三谷　真澄（龍谷大学教授・世界仏教文化研究センター基礎研究部門長）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門
参加人数	16 名

調査報告会	
テーマ	石山寺所蔵『浄土論』調査報告―『浄土論』諸本との関係を中心に―
開催日時	2024 年 1 月 20 日（土）15:30～17:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	辻本　俊郎（龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員）
司　会	都河　陽介（龍谷大学講師）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」
参加人数	17 名

講演会	
テーマ	荘厳経論と大乗荘厳経論
開催日時	2024 年 2 月 16 日（金）15:15～17:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 北黌 202 教室
講　師	松田　和信（佛教大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 大蔵経総合研究班
共　催	龍谷学会
参加人数	37 名

2022 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会	
テーマ	The Portuguese Discovery of Buddhism and the Changing Identity of a Sri Lankan Tooth Relic
開催日時	2024 年 2 月 20 日（火）13:30～15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）
講演者	John Strong（ベイツ大学名誉教授）
司　会	那須　英勝（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	17 名

公開研究会	
テーマ	三業惑乱と香月院深励
開催日時	2024 年 2 月 20 日（火）17:00～18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 北黌 106 教室
講　師	芹口　真結子（聖心女子大学専任講師）
司　会	能美　潤史（龍谷大学准教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 特定公募研究「大瀛『横超直道金剛錍』の研究」（研究代表者：殿内恒）
参加人数	28 名

講演会	
テーマ	仮名草子（合戦物）における宗教的説話について
開催日時	2024 年 2 月 21 日（水）15:00～17:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 302 教室
講　師	位田　絵美（近畿大学教授）

主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 古典籍総合資料研究班 「龍谷大学大宮図書館所蔵近世勧化本選集の作成をめざす研究」
参加人数	20 名

国際研究セミナー	
テーマ	デジタルヒューマニティーズ最前線 2024
開催日時	2024 年 3 月 1 日（金）10:00〜12:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
プログラム	発表 1　“Developing Digital Tools for an Online Audience: Customising and Modernising the IDP Website” Anastasia Pineschi（British Library IDP Project Manager) 発表 2　「清代モンゴル史研究〜その地平と展望」 Ochir Oyunjargal（Mongolian National University）
コメンテーター	岡田　至弘（龍谷大学名誉教授） 松川　節（大谷大学教授）
主　催	龍谷大学古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター
共　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 西域総合研究班
参加人数	35 名

特別講演会	
テーマ	古典籍・文化財のデジタルアーカイブが魅せる未来像
開催日時	2024 年 3 月 2 日（土）9:30〜12:35
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
プログラム	発表 1　「IDP のデジタルヒューマニティーズへの貢献と将来的展望」 Anastasia Pineschi（British Library IDP Project Manager） Adi Keinan-Schoonbaert（British Library, Digital Curator） 発表 2　「考古学とデジタルアーカイブ――その期待と展望」 Ayudai Ochir （Japan-Mongol Cooperative Bichees Research Project: Leader）

	発表 3　「宗教テクスト文化遺産アーカイヴスの意義 ——本證寺・四天王寺・青蓮院の事例を中心として」 阿部　泰郎（名古屋大学名誉教授・龍谷大学教授）
司　会	中田　裕子・森　正和（龍谷大学）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 西域総合研究班
共　催	龍谷大学古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター
参加人数	49 名

ワークショップ	
テーマ	Buddhist Spiritual Care Programs: Adapting Tradition to Contemporary Care
開催日時	2024 年 3 月 9 日（土）13:00～15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）
講演者	Nathan Michon (龍谷大学 日本学術振興会・外国人特別研究員) Kanae Kawamoto (東京大学 東洋文化研究所 日本学術振興会特別研究員) Bee Scherer (Vrije Universiteit Amsterdam 教授)
司　会	那須　英勝（龍谷大学教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	31 名（内オンライン 21 名）

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター(CHSR) 2023 年度研究活動一覧表

特別講義	
テーマ	京都府の自殺対策の理念と実際
開催日時	2023 年 5 月 24 日（水）13:30～15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 202 教室
講　師	宮村　匡彦氏（京都府健康福祉部地域福祉推進課参事） 粟津　彩氏（京都府健康福祉部地域福祉推進課副主査）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門
共　催	協力：京都府健康福祉部　地域福祉推進課
参加人数	12 名

記念講演会	
テーマ	龍谷大学ジェンダーと宗教研究センターの取り組み 近代真宗女性教化の諸相（特別展示図録）の解説
開催日時	2023 年 6 月 17 日（土）13：45～15：15
開催場所	京都女子大学 C501 教室
講演者	岩田　真美（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長） 中西　直樹（龍谷大学文学部教授）
主　催	真宗連合学会
参加人数	120 名

グリーフケア講座

テーマ	インターフェイス（interfaith）～ 臨床宗教師とインターフェイスの関わり
開催日時	2023 年 7 月 4 日（火）15:15～16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	金田　諦應（カフェデモンク主宰）
司　会	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）
主　催	世界仏教文化研究センター応用研究部門 人間･科学･宗教オープンリサーチセンター
参加人数	15 名

特別講義	
テーマ	親鸞さんと愉快な仲間　悪人の救い
開催日時	2023 年 7 月 5 日（水）9:15～10:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
講　師	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）
出　演	龍谷大学大学院実践研究科 Namo Ami Fellows
協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門　人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター
参加人数	80 名

シンポジウム「**Buddhism and Crisis Care Symposium**」	
テーマ	Refuge in the Storm:Buddhist Voices in Crisis Care
開催日時	2023 年 7 月 12 日（水）11：05～12：30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 203 教室
講　師	Nathaniel Michon（日本学術振興会外国人特別研究員）
スピーカー	谷山　洋三（東北大学大学院文学研究科教授）
司会･応答	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）

主　催	日本学術振興会科学研究費基金特別研究員奨励費「臨床宗教師のケアー現代日本の仏教チャプレンとスピリチュアルケア運動」(23KF0071) 研究代表者　鍋島直樹（龍谷大学）
協　力	龍谷大学　世界仏教文化研究センター応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター 大学院実践真宗学研究科「真宗教義学研究」
参加人数	30 名

臨床宗教師研修　特別講義	
テーマ	「スピリチュアルケア」と会話記録検討会
開催日時	2023 年 7 月 13 日（木）13：30～18：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	谷山　洋三（東北大学大学院文学研究科教授）
主　催	龍谷大学大学院実践真宗学研究科
協　力	龍谷大学　世界仏教文化研究センター応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター
参加人数	12 名

特別講演会	
テーマ	美しい未来のために「生きる」をデザインする
開催日時	2023 年 10 月 4 日（水）13:30～15:00
開催場所	龍谷大学深草学舎 顕真館
講　師	幾田　桃子（株式会社サヴァン CEO）
対　談	入澤　崇（龍谷大学学長）
司　会	水尾　文子（龍谷大学文学部教授）
主　催	龍谷世界仏教文化研究センター応用研究部門（RCWBC）ジェンダーと宗教研究センター 龍谷大学グローバル・アフェアーズ研究センター

共　催	花園大学人権教育研究センター 龍谷大学宗教部
参加人数	62 名

ディスカッション形式講演会	
テーマ	「固定観念」をテーマに「平等」についてディスカッション
開催日時	2023 年 10 月 5 日（木）13:30〜15:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌 2 階大会議室
講　師	幾田　桃子（社会活動家） 千々松　由貴（社会活動家）
司　会	水尾　文子（龍谷大学文学部教授）
主　催	龍谷学会
協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC）応用研究部門
参加人数	40 名

特別公演	
テーマ	とびだせビャクドー！ジッセンジャー—
開催日時	2023 年 10 月 25 日（火）9:15〜10:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室
講　師	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）
主　催	龍谷大学世界仏教文化研究センター人間･科学･宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）
協　力	龍谷大学大学院実践真宗学研究科 2023 年度 Jissenjya Project 代表　中山晃耀（M2）
参加人数	80 名

グリーフケア講座	
テーマ	臨床宗教師の宗教的ケア
開催日時	2023 年 11 月 9 日（木）15:15～16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室
講　師	谷山　洋三（東北大学大学院文学研究科教授）
司　会	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）
主　催	世界仏教文化研究センター応用研究部門 人間･科学･宗教オープンリサーチセンター
参加人数	15 名

特別講義	
テーマ	浄土教死生観と臨床宗教師のケア
開催日時	2023 年 11 月 28 日（火）15:15～16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 北黌 101 教室
講　師	堀内　裕子氏（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程３年）
主　催	日本学術振興会科学研究費基金特別研究員奨励費「臨床宗教師のケア–現代日本の仏教チャプレンとスピリチュアルケア運動」(23KF0071)研究代表者 鍋島直樹（龍谷大学）
協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター人間･科学･宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）、大学院文学研究科「真宗伝道学特殊研究」
参加人数	10 名

シンポジウム	
テーマ	恋文💕大震災の悲しみに寄り添う
開催日時	2024 年 1 月 17 日（水）9:15～10:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室

講　演	菅原　文子（気仙沼市ご遺族　すがとよ酒店三代目女将）
対　談	鍋島　直樹（龍谷大学文学部教授）
主　催	日本学術振興会科学研究費基金特別研究員奨励費「臨床宗教師のケアー現代日本の仏教チャプレンとスピリチュアルケア運動」（23KF0071）研究代表者　鍋島直樹（龍谷大学）
協　力	龍谷大学世界仏教文化研究センター応用部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター
参加人数	80 名

シンポジウム	
テーマ	新春シンポジウム「臨床宗教師研修の気づきと近未来」
開催日時	2024 年 1 月 17 日（水）15:30～16:55
開催場所	龍谷大学大宮学舎 本館講堂
プログラム	■基調講演　15:40～16:10 「臨床宗教師の現状と近未来」 講師　谷山洋三（東北大学大学院文学研究科教授） ■発表　16:10～16:25 「京都府と臨床宗教師との連携」 鍋島直樹（龍谷大学文学部真宗学科教授・研修主任） ■発表　研修生と教員によるふりかえりと近未来 16:25～16:55 座長　森田敬史（龍谷大学実践真宗学研究科教授・研修副主任） 研修生　浅野尚徳、宇佐美智瑞、金尾正映、椿唯信、赤松勧誠、真田秀亮 ※アドバイザリーボード　谷山洋三氏　打本弘祐（龍谷大学農学部准教授・研修副主任）
主　催	世界仏教文化研究センター（RCWBC）応用部門　人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター 龍谷大学大学院実践真宗学研究科
参加人数	20 名

（※詳細は世界仏教文化研究センター応用研究部門 2023 年度研究活動報告書を参照のこと）

2023年度
主要研究活動 概要

❖ 学術シンポジウム ❖

龍谷ミュージアム春季特別展
「真宗と聖徳太子」関連イベント

聖徳太子と真宗の文化遺産
―秘伝・図像と信仰の世界―

2023 年 5 月 20 日（土）13:30～17:00
龍谷大学大宮キャンパス東黌 101 教室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 5 月 20 日（土）、龍谷ミュージアム春季特別展　親鸞聖人御生誕 850 年・立教開宗 800 年記念「真宗と聖徳太子」展の関連イベントとして、学術シンポジウム「聖徳太子と真宗の文化遺産――秘伝・図像と信仰の世界」が開催された。

親鸞聖人が深く崇敬された聖徳太子への信仰は、浄土真宗において豊かに花開いた。今回のシンポジウムでは、聖徳太子について造詣深い研究者のうち、吉原浩人氏（早稲田大学教授）・津田徹英氏（青山学院大学教授）・西岡芳文氏（上智大学教授）をお招きし、文学・美術・歴史の各分野から、太子伝の秘伝や、太子の尊像、また東国の太子信仰について講演を頂戴した。加えて、一本崇之氏（大和文華館学芸員）・村松加奈子氏（龍谷ミュージアム准教授）の 2 名の美術館の専門家から、太子絵伝についてコメントを述べた。当日は、阿部泰郎氏（龍谷大学教授）の司会の下、活発な意見交換が行われた。

登 壇 者 一 同： 阿部 氏・吉原 氏・津田 氏・西岡 氏・一本 氏・村松 氏

登壇者一同

以下、各講演・報告の梗概を記す。

まず、吉原氏は「『聖徳太子絵伝』の秘事口伝―救世観音の転生と真宗―」と題する基調講演において、数ある絵伝の未解決の謎のうち、6 点を取り上げた。①瑞泉寺本『聖徳太子絵伝』第一幅に、なぜ釈迦如来と善光寺一光三尊の並坐像が描かれるのか。②瑞泉寺本『聖徳太子絵伝』第七幅最上段の場面は、何を表しているのか。③称名寺本『聖徳太子絵伝』第四幅上から二段目右「□□□□□馬頭夫人（めずぶにん）事」は、何を表しているのか。④本誓寺本『聖徳太子絵伝』第三幅の最上部には六角堂建立が、それ以下には膳妃婚姻譚が描かれ、第五幅上部から順に、四天王寺・善光寺・太子葬送・親鸞伝が描かれるが、なぜなのか。⑤本證寺本『聖徳太子絵伝』第四幅には、厳島神社・熊野大社・道士勝負・守屋合戦が同一画面に描かれ、本證寺本『善光寺如来絵伝』第四幅の上部には芹摘姫説話が描かれ、下部に善光寺伽藍が大きく描かれるのは、なぜなのか。⑥『親鸞聖人伝絵』上巻「六角夢想」では、親鸞が白衣の如意輪観音を拝み、「蓮位夢想」では聖徳太子が親鸞を拝むが、なぜなのか。これらの問題について、『上宮太子御遺言記』『聖徳太子内因曼陀羅』『今昔物語集』や、『後漢書』『法苑珠林』『集神州三宝感通録』など日中の史資料を駆使して分析を行い、仮説を提示した。

ついで、津田氏は「十四世紀前半における真宗門徒の太子造像の諸相―遍在と偏在の問題をめぐって―」と題する報告において、真宗門徒の太子造像をめぐって、愛知・妙源寺三幅本「光明本尊」和朝幅部分を取り上げ、年記を伴う現存最古の彫像とみなされる茨城・無量寺像をはじめ、中世真宗で受容をみた振り分け髪童子形太子像のうち、特に十四世紀に遡る七条袈裟を着用する作例との比較を施した。太子単独の造像である場合と、伺候する僧俗を伴う場合における太子に対して何が求められたのか、その働きがどのように表現されたのか、などについて、造像の持物や袈裟の着法など美術学の面から細緻な説明を行った。その上、これらの造像にみられる特徴的な違いから、真宗門徒の太子造像における地域偏在性を語り、各地域の造像に貢献した人物の存在を探った。

最後に、西岡氏は「東国初期真宗と聖徳太子」と題する報告において、歴史学の立場から、親鸞入寂後の東国真宗門徒の動向、とりわけ東国真宗が全国に展開していく過程や、他宗（浄土宗）から批判を蒙った真宗門徒の太子信仰などの問題を取り上げ、年表等史資料をもって紹介を行った。特に、シアトル美術館（米国）所蔵「源誓上人絵伝」（甲斐万福寺旧蔵）に描かれる佛光寺落慶供養の場面（西岡説。一般的には本願寺を表したものとされる）から、関東の門徒たちが雑多な存在ではなく、京都に佛光寺を建立する際、相当な支援者が存在したのではないかとの持説は、興味深い。関東で発達した東国真宗というのは、ネットワークをしっかりと繋がってもって、一致した行動をとったのであろうと推測した。

❖ 公開シンポジウム ❖

公開シンポジウム

世界で実践力を発揮している「お寺」

2023 年 12 月 14 日（木）13:30～16:45

龍谷大学大宮学舎 清和館３階ホール／YouTube ライブ配信

会場の様子

❖　概　　要　❖

2023 年 12 月 14 日（木）、龍谷大学大宮キャンパスにて公開シンポジウム「世界で実践力を発揮している「お寺」」が開催された。司会・進行は葛野洋明氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）が担当した。本シンポジウムの概要は以下の通りである。

＜第 1 部：提言 1＞
講 演 者：ワンドラ睦 氏（浄土真宗本願寺派米国仏教団オレンジ郡仏教会開教使）

ワンドラ睦 氏

第一部では、まずワンドラ睦氏（浄土真宗本願寺派米国仏教団オレンジ郡仏教会開教使）が 1893 年の万国宗教会議とそれと共に始まる日本仏教の海外進出の過程を紹介した。とりわけ、北米における日本仏教の展開や、各地で設立された寺院、そして、そうした寺院によって展開されてきた教育プログラム、コミュニティ活動などについて、具体例を交えて説明した。ワンドラ氏が長らく関わっている米国仏教団オレンジ郡仏教会は、当該地域のあらゆる年代や社会層の人々に対して、多様な活動を通じて社会に貢献し、仏教の教えを広める活動を行っている。

＜第１部：提言 2＞
講 演 者：土井 慶造 氏（浄土真宗本願寺派南米教団ブラジリア本願寺開教使）

土井 氏

続いて、ブラジルで長期にわたって活躍している土井慶造氏（浄土真宗本願寺派南米教団ブラジリア本願寺開教使）から、南米仏教団とブラジリア本願寺の歴史が紹介された。北米と異なって終戦後に活動が始まった南米では、1970 年代に日系社会を基盤として南米仏教団が最盛期を迎える。出稼ぎ移民によるブラジル日系社会の変化、日本からブラジルへの移民の歴史、ブラジリア本願寺の社会活動についても詳細に紹介された。また、土井氏はブラジリア本願寺が、文化活動のセンターとしても活動し、ポルトガル語による法話や対話形式の伝道の実践などにも心がけていると述べた。

＜第２部：発表＞

講 演 者：長岡 阿衣璃 氏（実践真宗学研究科１年次生）
橋本 顕正 氏（実践真宗学研究科３年次生）

第二部では、まず本学大学院生で真宗伝道学特殊研究（ハワイ研修）を受講した長岡阿衣璃氏（実践真宗学研究科１年次生）から、ハワイの仏教会の実践について、地域社会への積極的な関わりが認められることについて報告が行われた。次に同じく大学院生の橋本顕正氏（実践真宗学研究科３年次生）からは、カナダ留学での経験を踏まえ、僧侶が地域

社会に積極的に参加することの重要性が強調された。

＜第 2 部：ディスカッション＞

講 演 者： 葛野 洋明氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）
ワンドラ睦氏
土井 慶造氏
清岡 隆文氏（元龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授、本願寺布教使）

こうした北米、南米、ハワイ、カナダにおける仏教団体の活動を踏まえ、最後に葛野氏、ワンドラ氏、土井氏に清岡隆文氏（元龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授、本願寺布教使）を招いてのディスカッションが行われた。そこでは、世界の様々な地域において遂行されている仏教活動と適応能力が求められること、仏教の教えを現代社会に適合させるための伝道活動のあり方などが議論された。パネルディスカッションのまとめとして、清岡氏は、一度きりの人生を究極的に悔いなく安らかに充実して終わっていく、その究極は南無阿弥陀仏であり、それをいかに一人一人が自分のものとして受け入れていくかということに関わる大きな使命がお寺にあると思う、と総括した。

本シンポジウムは終始にわたり広い見地から質疑や議論が交わされ、盛況のうちに終了を迎えた。

葛野 氏、清岡 氏

❖ 講演会・研究セミナー ❖

2021 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会

Retracing the Development of Early Buddha-nature Teaching in India

2023 年 4 月 7 日（金）15:15～16:45
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 4 月 7 日（金）に、2021 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞の受賞者であるクリストファー V. ジョーンズ（Dr. Christopher V Jones）ケンブリッジ大学セルウィン・カレッジ 教授（Selwyn College, University of Cambridge）による、受賞記念講演会が行われた。講題は “Retracing the Development of Early Buddha-nature Teaching in India”（「インド初期仏性思想展開過程の再検討」）であった。桂紹隆氏（仏教伝道協会理事長（当時））がコメンテーターを務め、司会・進行は本学教授の那須英勝氏が担当した。

講 演 者：Christopher V Jones 氏（ケンブリッジ大学セルウィン・カレッジ 教授）

Christopher V Jones 氏

仏教研究ではよく指摘されるように、現世と来世における人間の永続的かつ不変なる我（アートマン *ātman*, permanent self）と見なされるものは、いかなる場合でも存在しないという考えは、仏教の教えの礎となってきた。古代インドの他の宗教では、本当の自己存在の根拠となる「我」を探求し、それを発見することが大事にされたのに対し、仏教の

教えでは、人間の経験のなかで常に変わらないものを探し求めることの虚しさについて積極的に説かれてきた。しかし、インドの初期仏教では普遍なる我への探求に関する言及は全くなかったのだろうか。実は、数少ないながらも、紀元前のインドで書かれた大乗仏教の伝統に属する影響力のある一連の経典では、一切衆生が常に、そして輪廻転生の過程において、永続的かつ超越的な仏性を持っていることについての言及がある。このような言及は、*tathāgatagarbha* という謎めいた表現について論じる際に述べられており、そのいくつかのテキストによれば、これこそは真の意味での「我」であるという。本講義では、Jones 氏が主にインドの初期仏典に見られる仏性の概念について説明しながら、東アジア地域におけるその受容についても検討された。

Tathāgatagarbha とは、「仏の胎/胎児」「仏を包含するもの」「仏の蔵」などの意味を持っている。*Garbha* とは大切なものを包含する蔵を意味するが、漢訳仏典では「蔵」として翻訳・理解されたのに対して、チベット語訳では「本質的なもの（本性)」として翻訳されている。Jones 氏によれば、漢訳仏典における *garbha* とは、「仏を包含する蔵」であり、これはインド仏典（例えば、*Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*）における、一切衆生は *tathāgatagarbha* であるということを意味している。漢訳仏典では「一切衆生有如来蔵」と言及されており、「有」という字からも分かるように、一切衆生が *tathāgatagarbha* を有しているとして捉えている。また同じように、*buddhadhātu* という表現も用いられるが、これは「仏の本質」を意味し、漢訳仏典では「一切衆生の内には *buddhadhātu* がある」という言及があり、これもインドの初期大乗仏典の意味と一致しているという。

桂 氏（コメンテーター）

次に古代インドにおける如来蔵（*tathāgatagarbha*）思想関連の諸文献について考える際、高崎直道氏の『如来蔵思想の形成』（1974）に提示された分類は有益である。高崎氏は如来蔵思想形成史を描く上で、まず『究竟一乗宝性論』に結実していく流れとして、「三部経」に着目した。そして「仏性」関連のテキストとして『涅槃経』『央掘魔羅経』『大薩遮尼乾子所説経』を挙げ、*gotra* に関連するものとして『大雲経』『大乗十法経』を挙げた。このように多くのテキストがありながらも、これらのほとんどは原典が現存しておらず、漢訳やチベット訳といった翻訳が存在するのみである。そして、これらは必ずしも同じ原典を翻訳したと考えられないことに注意が必要である。例えば、仏性について議論する時、東アジア地域では『涅槃経』が重視されてきたものの、このテキストの四分の一に当たる内容は一つの原典から直訳されず、その内容もインドの『涅槃経』と大きく異なる。むろん、原典が不明な『涅槃経』の内容は重要ではないということではなく、そのような内容に関しては、他の内容と区別して検討すべきである。

そこで Jones 氏は、自著 *The Buddhist Self: On Tathāgatagarbha and Ātman*（University of Hawaii Press, 2021）において、仏性の概念の歴史的な変容について検討するために『如来蔵経』『不増不減経』『勝鬘経』『涅槃経』『央掘魔羅経』『大法鼓経』『究竟一乗宝性論』『入楞伽経』を主要な研究対象のテキストとした。これらのテキストはいずれも一切衆生は仏性を持っていると論じているが、仏性について微妙に異なる形で論じられており、上記の著書では、仏性に関するこうした異なった議論について検討される。仏性について触れられたインドのこれについて論じた最初のテキストについては何であったのかについては、異論があるものの、氏は先行研究を踏まえて、『涅槃経』がその最初のテキストである可能性があると考えている。なぜなら、『涅槃経』では「仏の性質（*buddhadhātu*）は一切衆生に存在するものの、それは様々な苦の様態によって覆い隠されているので、衆生は、自らの内に、その存在を見ることができない。」と説かれているからである。

チベット訳『涅槃経』では、我が実際に存在しているにもかかわらず、人々はブッダの謎めいた発話について無知であるため、我の不在について心を養うのであると記されている。漢訳『大法鼓経』（*Mahābherī-sutra*）でも、我が存在することについても論じられている。しかし、ここで注意しなければならないことは、古代インドにおける「我（*ātman*）」の概念は、必ずしも一種類のものではなく、多義にわたる概念であった。その一種が「仏性」の概念として初期大乗仏教で展開したものが仏教独自の「我」および「仏性」の概念であった。後に、古代インドの「我（*ātman*）」の概念は、このように大乗仏教思想の中で変容していったのではないだろうか。

那須 氏（司会）

例えば、『勝鬘経』（*Śrīmālādevīsiṃhanāda-sutra*）では、古代インドのように、如来蔵（*tathāgatagarbha*）は我の概念と類似してものではなく、輪廻と往生に対する人間の意識として捉えている。如来蔵についての様々な解釈は、心についての教えとしてしか残らず、最終的には瑜伽行唯識学派の教義体系に組み込まれることになる。氏は、如来蔵という表現のこのような歴史的な展開と仏性の概念の変容過程の更なる検討対象として、現在『大雲経』（*Mahāmegha-sūtra*）について研究を続けている。このテキストは、これまでに漢訳とチベット語訳しか存在しないと思われていたが、近年、そのサンスクリット語版も発見された。このテキストでは、「如来蔵」という表現は一回しか使われていないものの、如来蔵という概念に類似した内容が頻出しており、初期大乗仏教における仏性の概念を理解するために新たな光を与えることが期待される。Jones 氏は、これまでに如来蔵の概念を検討するために対象とされなかったこうしたテキストを検討対象とし、初期仏教のみならず、東アジア地域における如来蔵と仏性の概念について研究を続ける予定である。

❖ ワークショップ ❖

ワークショップ

The Ambiguous Status of the Mahāmeghasūtra as a Buddha-nature text

2023 年 4 月 8 日（土）11:00～12:00
龍谷大学大宮学舎 西黌 2 階大会議室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 4 月 8 日（土）に、龍谷大学大宮キャンパスでは、2021 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞の受賞者であるクリストファー V. ジョーンズ（Dr. Christopher V Jones）ケンブリッジ大学セルウィン・カレッジ 教授（Selwyn College, University of Cambridge）によるワークショップが行われた。ワークショップのテーマは “The Ambiguous Status of the *Mahāmeghasūtra* as a Buddha-nature text”（「「仏性」を論じる仏典として『大雲経』（*Mahāmeghasūtra*）の曖昧さについて」）であった。司会・進行は本学教授の那須英勝氏が担当した。

講 演 者：Christopher V Jones 氏（ケンブリッジ大学セルウィン・カレッジ 教授）

Christopher V Jones 氏

本ワークショップでは、Jones 氏が 2020 年に出版された単著 *The Buddhist Self: On Tathagatagarbha and Atman*（University of Hawai'i Press）以後、主に『大雲経』（*Mahāmeghasūtra*）を中心に取り組んでいる新しい研究について講演された。高崎直道氏や Michael Radich 氏などの先行研究では「仏性の概念を理解するために『大雲経』が重要なテキストである」とされてきたが、氏はそうした従来の主張は間違いではないものの、最新の研究動向から言えば、必ずしもそうではない場合もあるという。それ故に氏が、仏性を理解する上で『大

雲経』というテキストの「曖昧な立場」に着目したのである。

まず氏は、古代インドにおける初期仏教の教えの中で「仏性」という概念について述べた上で、次にこの概念は「如来蔵」（*tathāgatagarbha*）思想とどの点において異なっているのか、文献を提示しながら紹介した。これらの 2 つの表現は類似しているが、同じではないことを注意すべきである。そして氏は、*Mahāmeghasūtra* に触れながら、このテキストにおける如来蔵への言及は、その他のテキストとどのように関係しているのかについて説明した。

最後に氏は、５世紀頃行われたとされる『大雲経』の漢訳版を取り上げて、このテキストは、その翻訳者である曇無讖（Dharmakṣema）によってどのように内容的な変更がなされたのか、具体例を提示しながら説明した。『大雲経』の漢訳とチベット語訳は、構造的に類似しつつも、細かいところでは異なっているため、それぞれが別々のルートで『大雲経』を受容したことが看取できる。なぜなら、曇無讖の漢訳版では、訳者による追加されたと思われる表現や描写は散見されるからである。内容的に見れば、漢訳版は『大乗涅槃経』と近いが、一方でチベット語訳版は仏性や如来蔵思想を十分に論じていない。こうした中、これまで存在が知られていなかったサンスクリット語版『大雲経』が近年発見され、漢訳、チベット語訳とサンスクリット語を比較検討できるようになった。

そこで、漢訳の内容を他の２種類テキストと比較検討した結果、漢訳版にある内容の一部は、他の 2 種類のテキストに存在しないことが確認できた。氏によれば、これは曇無讖によって追加された内容であるとしか考えられない。要するに、漢訳『大雲経』は、イン

質疑応答の様子

ドにおける特定の原典から直訳されたのではなく、曇無讖によって複数のテキストからアダプテーション（adaptation）され、編集されたテキストであった。特に『大雲経』に説かれたような仏性論は、チベット語訳やサンスクリット語には見られないからである。それ故に、先行研究で主張されてきた『大雲経』と「如来蔵」思想の関連性は不正確である可能性は高いと思われる。

Jones 氏の発表の後、那須氏の司会のもとで参加者から数多くの質疑がなされ、活発な議論が交わされ、ワークショップは終了を迎えた。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

特別国際講演会

1. The prototype of the ancient ṛṣi and the constructed figure of the Buddha in dhyāna

2. Eugène Burnouf and research on Indian Buddhism

2023 年 4 月 20 日（木）15:00～17:00
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）

Guillaume Ducoeur 氏、Kyong-Kon Kim 氏

❖ 概　　要 ❖

2023 年 4 月 20 日（木）に、龍谷大学大宮キャンパスでは、特別国際講演会が行われた。本講演会では、Kyong-Kon Kim 氏（ストラスブール大学准教授）が “Eugène Burnouf and research on Indian Buddhism”（「ウジェーヌ・ビュルヌフとインド仏教の研究」）について講演し、次に Guillaume Ducoeur 氏（ストラスブール大学教授）が “The prototype of the ancient ṛṣi and the constructed figure of the Buddha in dhyana”（「古代インドにおけるリシ（聖仙）の原型とディヤーナする釈迦像」）というテーマについて講演した。司会・進行は、本学教授の嵩満也氏が担当した。

＜講演 1＞
テ ー マ：Eugène Burnouf and research on Indian Buddhism
（ウジェーヌ・ビュルヌフとインド仏教の研究）
講 演 者：Kyong-Kon Kim 氏（ストラスブール大学准教授）

Kyong-Kon Kim 氏

まず Kyong-Kon Kim 氏は、その講題の通り、19 世紀フランスの仏教研究者であり、西洋における仏教研究の先駆者の一人でもあったウジェーヌ・ビュルヌフ（1801－1852）が著

した『インド仏教史序説』（*Introduction à l'histoire du buddhisme indien*、1844 年、647 頁）と『法華経』（*Le Lotus de la bonne loi*、1852 年、897p.）からの事例を取り上げつつ、ビュルヌフによる仏教研究の発展のための貢献について講演した。仏教研究においては、ビュルヌフが文献史学的なアプローチを重視し、その研究手法が後世の仏教学者やインド研究者に高く評価され、広く継承された。特に、テキストを中心としたビュルヌフの文献学的な研究方法は、欧米のみならずアジアでも、訓詁学的、哲学的、民族学的な研究手法と並んで、仏教研究の大きな軸の一つをなしている。ビュルヌフが Saddharmapuṇḍrīka sūtra という特定の経典をフランス語に完訳させた背景には、そうしたテキストに重視する姿勢があった。仏教研究の基礎を築いたビュルヌフの貢献は、現在では忘れられがちであるなか、Kim 氏はその再評価を目指している。

＜講演 2＞

テーマ：The prototype of the ancient ṛṣi and the constructed figure of the Buddha in dhyana
（古代インドにおけるリシ（聖仙）の原型とディヤーナする釈迦像）

講 演 者：Guillaume Ducoeur 氏（ストラスブール大学教授）

Guillaume Ducoeur 氏

次に Guillaume Ducoeur 氏は、古代インドの文献に見るリシ（ṛṣi、聖仙）の原型と、そのイメージが後にディヤーナ（禅定）する釈迦のイメージの中でいかにして継承されたのかについて発表した。従来の仏教伝記では、釈迦が悟りを開いて三明（trividyā）を獲得し

た前、同じく般涅盤（parinirvāṇa）の前にも、4 つの思索の状態（contemplation, ディヤーナ）を経たとされる。その一方で、仏教における重要な教えである四諦や八正道、あるいは古代仏教の教義に共通する縁起論などを説くとき、ディヤーナという言葉は使われることはなかった。Ducoeur 氏によれば、ディヤーナする釈迦にめぐる諸説は、後に仏教の教えの中で盛り込まれた。仏教の聖人伝作者は、とりわけ古代インドのヒンズー教などで論じられた ṛṣi の概念を取り入れて釈迦の伝記を論じようとした。例えば、リグ・ヴェーダでは、ṛṣi がその熱心な禅定を経て初めて天の法則（ṛta, cosmic order）を自覚することができたと論じられている。氏は、仏教の聖人伝作者にとって、釈迦は正法を悟った新しい ṛṣi（あるいは大仙、maharṣi）であったという。

三谷 氏（コメンテーター）、嵩 氏（司会）

講演者による講義後、三谷真澄氏（龍谷大学教授）によるコメントと質疑がなされた。三谷氏は、ビュルヌフの研究方法が日本の仏教研究世界に与えた影響や、その研究方法は現代の仏教研究においていかに重要であるのかについてコメントし、フランスの大学における仏教研究の状況などを含む多義にわたる議論と質疑が交わされた。そして、参加者・聴衆からも幅広い内容について活発な質疑があり、充実な議論が行われた後、講演会は終了を迎えた。

❖ **講演会・研究セミナー** ❖

龍谷ミュージアム春季特別展
「真宗と聖徳太子」関連イベント

聖徳太子絵解きフォーラム

―太子絵伝と絵解きの継承―

2023 年 4 月 30 日（日）13:30～17:00
龍谷大学大宮学舎 東黌 101 教室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 4 月 30 日（日）、龍谷ミュージアム春季特別展　親鸞聖人御生誕 850 年・立教開宗 800 年記念「真宗と聖徳太子」展の関連イベントとして、「聖徳太子絵解きフォーラム――太子絵伝と絵解きの継承」が開催された。

日本の仏教の歴史とともに展開してきた聖徳太子への信仰と伝承は、その生涯をあらわした太子絵伝というメディアによって説き広められた。この太子絵伝絵解きは、四天王寺の絵堂に始まり、浄土真宗に受け継がれて、現在もなお生き続けている。

今回の絵解きフォーラムでは、この聖徳太子絵伝絵解きに焦点を当てて、阿部泰郎氏（龍谷大学教授）の司会の下、四天王寺をはじめ、現役で活躍されている 4 名の講師による絵解き実演の後、石井公成駒澤大学名誉教授により、「『日本書紀』の守屋合戦こそが絵解きの前段階？」と題する特別講演が行われた。

講 演 者： 瀧藤 康教 師、齊籐 優華 師、竹部 俊惠 師、椰野 明仁 師

絵解きの様子

前半の絵解き実演では、主に本證寺聖徳太子絵伝（重要文化財）の絵像を用いて、太子信仰と太子絵伝絵解きの原点である四天王寺で復活再生された絵堂のための絵解きをはじめとして、越中井波別院の瑞泉寺で江戸時代から連綿と続く、真宗の太子伝絵解きの伝統を守る絵解きが紹介され、さらに愛知で仏教絵解きの伝統芸を現代に活かす試みを多彩に繰り広げている三河すーぱー絵解き座の新たな絵解きが披露された。四天王寺 瀧藤康教師による絵解きは、平易な言葉遣いや抑揚をつけた語り口調で今風のパフォーマンスを演出したのに対して、南砺 真教寺 齊籐優華師・井波 妙蓮寺 竹部俊惠師による絵解きは、真宗色の濃い伝統的なもので、聴衆から「ナンマンダブ　ナンマンダブ」という受け念仏を呼ぶほど情念のこもった演技であった。一方、三河すーぱー絵解き座座主である椰野明仁師による絵解きは、琵琶の演奏を伴う語りで、聴衆にインパクトを与えた。

講 演 者： 石井 公成 氏（駒澤大学名誉教授）

石井 氏

後半の特別「口演」において、石井氏は、『日本書紀』崇峻天皇即位前紀用明天皇二年（587）七月条、守屋合戦のくだりにおける、物部守屋死後、その従者である捕鳥部万の奮戦記事に注目し、このような四天王寺建立（前後の文脈）と一見、関係しなさそうな事柄がなぜ正史に

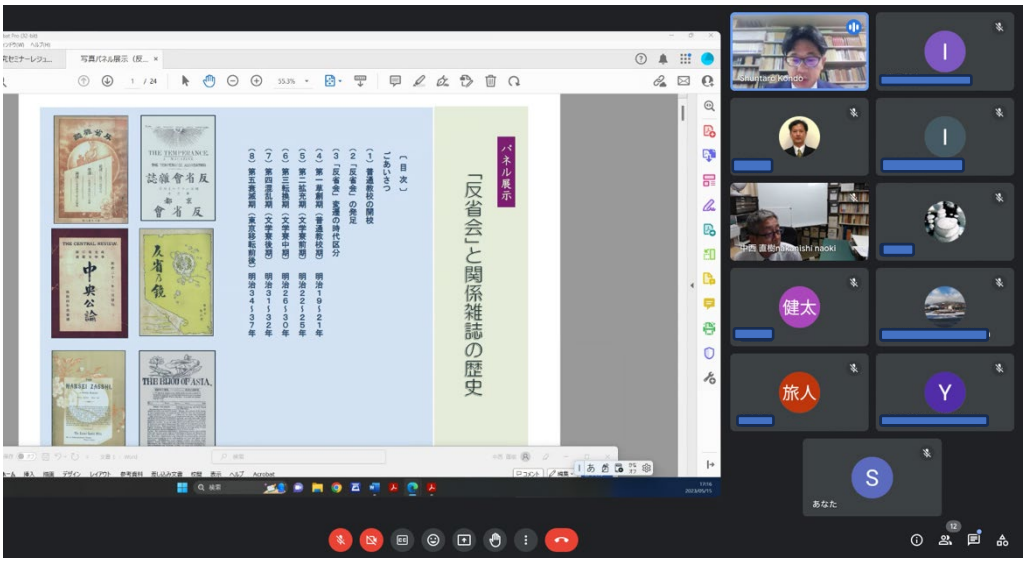
取り込まれたのかについて取り上げた。結論から言うと、天皇側に敗れた守屋側の武勇伝は、河内国周辺にいた守屋を支持していた人々のために、琵琶法師のような芸能者たちによって、聖徳太子の伝承とともに語り伝えられていたのではないかという。またこのような伝承が、『日本書紀』という正史に取り込まれた際に、漢訳仏典から用語を借りつつ、むりやりに漢文調に書き直されたため、不自然な漢文表現が散見するようになったのだとする。

❖　講演会・研究セミナー　❖

明治・大正期の龍谷大学関係雑誌

「反省会」興亡史
（1）草創期・拡充期
（2）転換期・混乱期・衰減期

（1）2023 年 5 月 15 日（月）17:15～18:45
（2）2023 年 5 月 22 日（月）17:15～18:45
オンライン開催（Google Meet）



研究セミナーの様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 5 月 15 日（月）・22 日（月）の二回に分けて、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門の常設研究班「仏教史・真宗史総合研究班」（代表：文学部歴史学科　中西直樹教授）主催、明治・大正期の龍谷大学関係雑誌に関する研究セミナー「「反省会」興亡史」をオンライン形式で開催した。併せて、2023 年 5 月 9 日（火）～5 月 27 日（土）の間、龍谷大学大宮学舎東黌 1 階ロビーにて、写真パネル展示「「反省会」と関係雑誌の歴史」を行った。司会は近藤俊太郎氏（龍谷大学非常勤講師）が担当した。

中西氏によると、1875 年に真宗本願寺派が設置した普通教校の学風は進取に富んだものであったと言われ、学生の主体的なサークル活動も盛んであった。なかでも、反省会はその代表的存在であり、禁酒・禁煙の普及を通じてモラル向上の啓発に努め、会員との財政・人権・文明・教育などについての意見交換の場として、機関誌『反省会雑誌』（のちに『反省雑誌』と改題）を創刊した。雑誌を通じて反省会の趣旨に賛同する者は急増し、やがて最盛期に 2 万人の会員を擁する全国的な巨大組織に発展していった。

一方、『反省雑誌』は、1899 年に『中央公論』と改題され、日本を代表する総合雑誌に発展して今日に至っている。このことはよく知られているが、反省会の実態とその歴史について取り上げられることは少ない。その原因には、反省会の歴史が、急速かつ複雑に変転する龍谷大学の前身校と密接に関係しており、理解しにくい点を挙げることができると考えられるという。

本研究セミナーでは、中西氏は、普通教校・文学寮・高輪仏教大学へと変遷する龍谷大学前身校の学校系統との関係を軸に、まず「普通教校設置とその理念」「反省会設立の経緯」を説明し、ついで以下の五期に分けて反省会の興亡史を概説した。

第一草創期（普通教校期）　　1886（明治 19）~1888（明治 21）年

（1）普通教校学生の学内団体としての性格が強い

（2）1888 年 4 月頃から会員勧誘活動展開

第二拡充期（文学寮前期）　　1889（明治 22）~1892（明治 25）年

（1）普通教校学生の東京進学（2 系統の仏教青年会運動）

（2）地方での会員急速拡張（吉丸徹太郎）

（3）反省会内（本部と地方）の軋轢表面化

（4）中西牛郎の新仏教論の影響大（後に失脚）

（5）玉本町に出版体制整備（反省会本部・海外宣教会・新報社・興教書院・令徳会雑誌部）

第三転換期（文学寮中期） 1893（明治 23）~1897（明治 30）年

（1）島地黙雷会長の下で本部役員の刷新・地方支部の再編（羽田荷生の地方巡回による拡大路線）

（2）宣教部設置→1895 年以降、会員拡大路線の転換

（3）教育部設置（文学寮予備校）

（4）『反省雑誌』の誌面充実→反省会の活動記事減少→反省雑誌社の東京移転（反省会からの分離促進）

第四混迷期（文学寮後期） 1898（明治 31）~1900（明治 33）年

（1）『反省雑誌』=『中央公論』と改題、総合雑誌に発展、反省会との関係断絶

（2）反省会副会長・文学寮長の薗田宗恵=反省会との連携を深め文学寮の文部省認可中学校への昇格を企図

（3）文学寮校友会誌『松籟』、反省会本部機関誌『反省』の創刊、反省会慈善部新設

（4）保守派の妨害→99.6 薗田北米へ（文学寮長退任）→文学寮・反省会の活動停滞

第五衰滅期（東京移転前後） 1901（明治 34）~1904（明治 37）年

（1）学校条例発布により文学寮消滅

（2）東京に高輪分教場（後の高輪仏教大学）開設後に反省会も東京移転

（3）反省会=高輪仏教大学の校友会に付随する形式で存続→高輪仏教大学の廃校とともに消滅

❖ 共催事業・その他 ❖

国際ワークショップ

東アジア仏教の交流: 宋・鎌倉・室町時代に杭州圏と日本とのつながりを考察する

2023 年 5 月 22 日（金）、23 日（火）、26 日（金）
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室（22 日、26 日）、同清和館 3 階ホール（23 日）
／いずれもオンライン同時開催（Zoom）

会場の様子

❖　概　　要　❖

龍谷大学では、2023 年 5 月 22 日～26 日（月～金）にかけて、龍谷大学、花園大学およびアメリカのアリゾナ大学の共催で「東アジア仏教の交流:宋・鎌倉・室町時代に杭州圏と日本とのつながりを考察する」というテーマで国際ワークショップが行われた。本ワークショップは、中国の杭州地方（江南）に発展した仏教に焦点を当てつつ、それがいかにして東アジア地域における仏教の発展の契機となったのか、その過程を解明することを目的としたものであった。

本ワークショップの一環として、龍谷大学世界仏教文化研究センターの共催で、2023 年 5 月 22 日（月）に Bernard Faure 氏（コロンビア大学教授）、2023 年 5 月 23 日（火）に John Jorgensen 氏　（独立研究者）、最後に 2023 年 5 月 26 日（金）に Jin Y. Park 氏（アメリカン大学教授）に公開でハイブリッドの基調講演をして頂いた。司会と進行は本学教授の嵩満也氏が担当した。各講演者の講演の概要は以下の通りである。

＜5 月 22 日（月）＞

講 演 者：Bernard Faure 氏（コロンビア大学教授）

Bernard Faure 氏

第 1 回目の 2023 年 5 月 22 日（月）の講演者である Bernard Faure 氏の講題は「圓仁から圓爾へ二都物語」であった。氏は、第 3 代天台座主で入唐八家でもあった圓仁および鎌倉時代中期の臨済宗の僧であった圓爾を事例に、8 世紀から 13 世紀にかけて、東アジアン地域における仏教について考える際、どうしても無視できない中国の杭州地方と日本仏教の中心地であった京都の間で行われた文化的な交流について講演した。氏によれば、現存する当時の資料などから、入唐入宋した京都の天台僧らが、当時、世界で最も大きな都市であった杭州市とその仏教文化に圧倒されたことが分かる。中世時代に、仏教を中心とする杭州と京都の間で行われたこうした文化的な交流は、日本仏教のみならず、日本の美術、文学、医学・医療をはじめ、疫病などに関する民俗信仰までを形成させたのである。最後に氏は、これまでの歴史の中で語ることはなかった、このような文化的な交流を解明するためには、国を超えた東アジアという広い地域間の交流について更なる研究が必要になることを指摘して講演を終えた。

＜5 月 23 日（火）＞

講 演 者：John Jorgensen 氏（独立研究者）

John Jorgensen 氏

次に 2023 年 5 月 23 日（火）の講演者である John Jorgensen 氏は「無著道忠の作品にみる妙心寺と徑山寺」という講題に沿って、従来の杭州圏と日本間の仏教的な交流史の中であまり注目されてこなかった無著道忠を取り上げ、彼が残した数多くのテキストに見る妙心寺と徑山寺の描写について講演した。とりわけ氏は、禅宗における最も重要な文献学者で

ある無著と黄檗宗との関係、次に無著が捉えた日本の臨済宗妙心寺派の大本山の寺院である妙心寺と中国五山の一つである徑山寺、最後に無著が形成した禅学と禅宗美術について詳細に講演した。

＜2023 年 5 月 26 日（金）＞
講 演 者：Jin Y. Park 氏（アメリカン大学教授）

Jin Y. Park 氏

最後に 2023 年 5 月 26 日（金）に Jin Y. Park 氏は「性と法系統：韓国禅宗仏教の尼僧」という講題で、韓国の禅宗という特定の宗派における比丘尼とジェンダーの問題について講演した。従来、特定の宗教あるいは国・社会における女性と宗教の関係、そして女性による入門の社会的な背景などの視点から、宗教とジェンダーの絡み合いについて研究されてきたが、韓国の特定の仏教宗派における女性について論じる研究は少なかった。そこで氏は、韓国禅宗仏教における尼僧は、いかなる状況のなかで仏門に入り、そしてそれを指し示すどのような歴史的な資料が残されているのか、さらには韓国禅宗仏教における尼僧の研究は、韓国禅宗仏教そのものを理解するためにどのように役に立つのかについて講演した。

上記３氏による講演では、京都の寺院などに残された杭州仏教文化に関連する様々な資料が紹介され、そうすることで杭州地域と京都間の仏教的な交流について新たな光を当てることができたと言える。なお、各回の講演会の時、参加された大学院生を中心に、多くの参加者・聴衆から幅広い内容について活発な質疑がなされ、充実した議論も行われた。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

菩薩の学びと自利・利他行

2023 年 5 月 25 日（木）13:30～15:00
龍谷大学大宮学舎　本館２階講堂

講演会の様子

❖　概　　要　❖

2023 年 5 月 25 日（木）、龍谷大学仏教学大会において、龍谷大学名誉教授の若原雄昭氏より「菩薩の学びと自利・利他行」と題した講演会が開催された。コロナ禍を経て、実に四年ぶりの開催となった仏教学大会には教員をはじめ多くの学生が参加し、会場はほぼ満席となった。

講 演 者：若原 雄昭 氏（龍谷大学名誉教授）

若原 氏

講演は、コロナ禍が大学にとって「学び」とは何かを考え直す機会になったと始められ、仏教における学び、すなわち菩薩の学びについてインド大乗仏教瑜伽行派の重要典籍である『菩薩地』（*Bodhisattva-bhūmi*）に基づいて語られた。

『菩薩地』というのは、若原雄昭氏が長年研究に取り組んでいる、『大乗荘厳経論』（*Mahāyāna-sūtra-alaṃkāra*）の元になった『瑜伽師地論』（*Yogācāra-bhūmi*）の中の一書である。現在、菩薩の学びについて説かれる『大乗荘厳経論』第五章を、「菩薩の自利利他行」

と題して出版準備中であるという。

『菩薩地』では、菩薩の学び（śikṣā）として、菩薩の素質を潜在的に備えた凡夫が本当の菩薩へと成長していくためのカリキュラムが示される。これは『菩薩地』が提示する修学事項の最初に位置する「自他利品」において説かれ、自利・利他は菩薩の学びを方向付けるものとされている。この自利・利他は大乗仏教における重要な理念であるが、すでに初期仏典中にその片鱗が見られ、この理念がいつ生じたのかは、大乗仏教の成立にも関わる重要な問題であるという。

また「学」は初期仏教以来、戒・定・慧の三学として示されてきた。このうち「戒」（śikṣā）とは自己を律するためのものであるが、戒律の条項は学処（śikṣā-pada）といい、「学」とは本来的には「戒」を指していた可能性が指摘された。そしてこの「学」と「戒」の緊密な関係性は『菩薩地』を理解する上で重要なものであると語られた。

『菩薩地』に示される菩薩の学びは、決して我々から遠いものではない。何を、どのように学び、何者になるべきかというプロセスは現代の教育にも通じるものである。本講演を通して、学ぶ者、そして学ばせる者が、「学び」をどう考えるかという問題提起が行われた。

❖ 共催事業・その他 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター　国際ワークショップ

The Eleventh Workshop on *Tannishō* Commentarial Materials

第 11 回『歎異抄』註釈ワークショップ

2023 年 6 月 9 日(金)～11 日（日）

龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室

開催挨拶の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 6 月 9 日（金）から 11 日（日）にかけて、龍谷大学を会場に第 11 回『歎異抄』ワークショップが開催された。本ワークショップは、学術交流協定を結ぶ龍谷大学世界仏教文化研究センター、大谷大学真宗総合研究所と米国カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所の三研究機関が主催するもので、今回で 11 回目となる。

嵩氏による趣意説明の様子

この度は円智『歎異抄私記』（1662 年）・寿国『歎異抄可笑記』（1740 年）・香月院深励『歎異抄講義』（1801～8 年）という三つのテキストごとに班にわかれ、各註釈書の精読と議論を経た上で、原文の英訳作業が行われた。今回は第十三条と第十四条についての注釈箇所の英訳が行われた。出席者は三日間にわたり、各翻訳グループの部屋を移動しながら、異なる注釈内容を学ぶとともにその英訳作業のプロセスに参加した。開催中の二日目、そして最後の日に各班のリーダーが、それぞれのテキストの主な議論の内容と特色について紹介し、翻訳の進捗状況について報告を行った。アメリカ（UCB、シカゴ大学大学院生）・ポーランド（ワルシャワ大学）・韓国・中国・日本などから多くの研究者が参集し、活発な議論が交わされた。なお次回のワークショップは 2024 年 3 月に、カリフォルニア州バークレー市の浄土真宗センターを会場に行われる予定である。

＜6 月 9 日（金）＞

10:00-11:00 Introduction, Discussion of the Aims of the Workshop
(開催挨拶、ワークショップの目的についての議論)
ファシリテーター：Dake Mitsuya (龍谷大学　教授)
11:00-12:00 Small Group Translation Session 1（小グループ翻訳会議1）
13:00-17:00 Small Group Translation Session 2（小グループ翻訳会議2）
参加者：全員

ブルム氏

＜6 月 10 日（土）＞

10:00-12:00 Small Group Translation Session 3（小グループ翻訳会議3）
13:00-17:00 Small Group Translation Session 4（小グループ翻訳会議4）
参加者：全員

深励班の作業様子

＜6 月 11 日(日)＞

10:00-12:00 Small Group Translation Session 5（小グループ翻訳会議5）

13:00-15:00 Small Group Translation Session 6（小グループ翻訳会議6）

15:00-16:30 Presentation of small group translations and plans for the next workshop

（各班の進捗状況発表と次回のワークショップについて紹介）

参加者：全員

円智班の作業様子

❖　**講演会・研究セミナー**　❖

研究セミナー

瑜伽行派の経の修習法

2023 年 6 月 20 日（火）15:15～16:45
龍谷大学大宮学舎　西黌２階大会議室

講演の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 6 月 20 日（火）、大谷大学 名誉教授の小谷信千代氏より「瑜伽行派の経の修習法」と題した講演会が開催された。講演では、世親によって著された『浄土論』において、瑜伽行派の経の修習法に基づいて、往生して仏にまみえるための修行法が示されていることが語られた。

講 演 者：小谷 信千代 氏（大谷大学名誉教授）

小谷 氏

『浄土論』に示される五念門の一つ、観察門では止観という心を落ち着けるための瞑想修行に基づいて、仏国土の様相や経の文言を一つ一つ個別に観察すること、対してそれらを一語に集約して観察すること、という二通りの観察法が示されている。修行の最初には、まずあらゆるものから広く学び、そしてだんだんと一点に絞って観察していく。最終的にはこの二つのあり方を併せ持つようになっていくが、ここに瑜伽行派の修行法の特色を見ることができると語られた。

講演後、コメンテーターをつとめた上野隆平氏（龍谷大学講師）は『浄土論』中にあら

われる「如実に」という語について触れた。小谷氏は「如実に」とはつまり「正しく」という意味であるが、それはつまり経の教えに適うものであるということであり、それもまた瑜伽行派の経に対するあり方そのものであると述べた。またフロアからは、世親が『浄土論』を著した目的に関する話題が上がり、さまざまな人に浄土の有り様をわかりやすく伝えたいという思いがあったのではないか、と語られた。

『浄土論』に描かれる修行者は、仏教に精通した出家者などではなく、凡夫の菩薩である。『浄土論』は、そんな修行者に対して、まず具体的に浄土のイメージを湧かせ、そこに生まれたいと願う心を持たせようとしている。小谷氏から、このように受け止めやすい形で浄土を理解することが重要であると語られ、本講演会が締め括られた。

記念写真

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

Travel writing and the Reconstruction of Buddhism: The case of the Mahabodhi Journal (1909-1942)

2023 年 6 月 21 日（水）17:00～18:30
龍谷大学大宮学舎 東黌 202 室／オンライン開催（Zoom）

DI COSTANZO Thierry 氏

❖ 概　　要 ❖

2023 年 6 月 21 日（水）に、龍谷大学大宮キャンパスでは、DI COSTANZO Thierry（ストラスブール大学准教授）による講演会が行われた。講演会のテーマは “Travel writing and the Reconstruction of Buddhism: The Case of the Mahabodhi Journal (1909-1942)”（「紀行文学と仏教の再構築：Mahabodhi Journal (1909-1942)を中心に」）であった。司会・進行は本学教授の嵩満也氏が担当した。本講演会の概要は以下の通りである。

講 演 者：DI COSTANZO Thierry 氏（ストラスブール大学准教授）

Thierry 氏

まず Thierry 氏は、ジョセフ・ナイのソフトパワー論を提示し、この枠組みは 20 世紀前半のアジアにおける仏教を理解する上で重要な役割を果たすと述べた。アジアにおける帝国支配をめぐる日本とイギリスの競争について考えるとき、とりわけ仏教のような宗教的な様相は、どのようにソフトパワーが利用されたのかを理解するために重要な意義を持っている。それと同時に、大英帝国の歴史を考察する際、南アジアにおけるヒンドゥー教や仏教などと共産主義思想がどのように交差したのか、それについても考察する必要がある。なぜなら、すでに先行研究で指摘されているように、この時期のインドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム、あるいは仏教ナショナリズムの台頭は、20 世紀初期のインドにおけ

る共産主義思想の繁栄と深く結びついているからである。

嵩 氏（司会）

次に 20 世紀初頭の南アジア地域で刊行された雑誌などの刊行物が、仏教の復興と伝道活動をどのように支えていたのかということが紹介された。とりわけ Thierry 氏は、有力な雑誌である *Mahabodhi Journal*（『マハーボディ・ジャーナル』）を取り上げ、この雑誌が仏教関係者にとってどのように重要なソフトパワーのツールであったのかについて述べた。この雑誌には様々なジャンルの内容が掲載されていたが、そのなかで特に仏教と深く関わっていた紀行文が特徴的なジャンルの一つであった。その当時、紀行文はアジアのみならず全世界で流行っており、とりわけアジアでは、仏教を含む宗教的なアイデンティティ形成と密接に関係していた。そこで氏は、『マハーボディ・ジャーナル』から具体例を示しながら、いつ頃から、どのような人物が、いかなる政治的な理由で、仏教的な紀行文を寄稿するようになったのかについて詳細に述べた。

初期頃の『マハーボディ・ジャーナル』に掲載された紀行文の中で、ヒンディー語における旅行記の父として知られる Rahul Sankrityayan（ラーフル・サンクリティヤム、1893－1963）というインド人作家が代表的な人物であったと言える。サンクリティヤムは、20 世紀初期にチベット、日本、中国など仏教と深い関係のある国々を訪れ、その体験をヒンディー語で書き残している。彼のそうした紀行文は『マハーボディ・ジャーナル』でも紹介され、世界中で注目されたのである。Thierry 氏は、サンクリティヤムのように、仏教を中心に書かれた紀行文は、後に南アジアの国々の外交政策にも大きな影響を与えたと結論づ

ける。講演の後、現地およびオンライン参加者から多義にわたる質疑と議論が交わされる中で講演会は終了を迎えた。

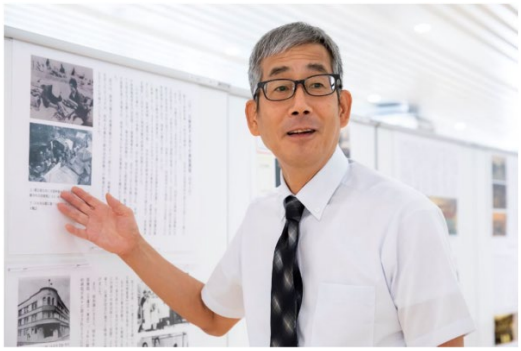
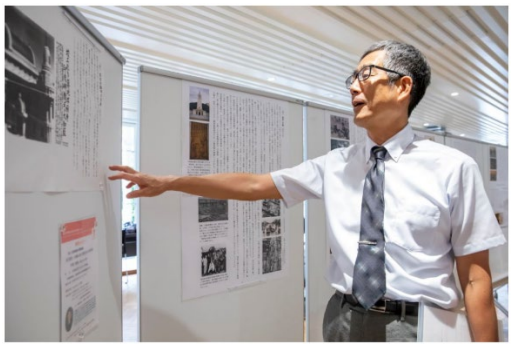
質疑応答の様子

❖ 講演会・研究セミナー ❖

〔パネル展示〕

仏教と災禍・病苦の近代史（解説）

2023 年 6 月 26 日（月）17:15～18:45
オンライン開催（Google Meet）

中西 氏（上）、パネル展示の様子（下）

❖ 概　　要 ❖

2023 年 6 月 23 日（金）～7 月 11 日（火）、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門の常設研究班「仏教史・真宗史総合研究班」（代表：文学部歴史学科　中西 直樹教授）主催、写真パネル展示「仏教と災禍・病苦の近代史」が、龍谷大学大宮学舎 東黌 1 階ロビーにて開催された。展示では、明治から戦前期までの災禍・病苦に際して、仏教者による対応と実態を、写真や史料約 70 点をパネル 22 枚に添えて解説を行った。

併せて、企画構成・執筆をすべて担った中西氏による解説セミナーが、6 月 26 日（月）にオンラインで行われた。司会は近藤俊太郎氏（龍谷大学非常勤講師）が担当した。

中西氏によると、仏教は、生老病死という人間の苦の問題を深く見つめ、それを乗り越えていく道を追求するものである。科学・医療技術が急速に進展した反面、環境・生命倫理に関わる新たな問題を生起した近代において、仏教者は、罹災者への救援・支援活動でだけでなく、感染症予防、看護師養成、保険、医療倫理構築、慈善病院設立など、幅広い領域での取り組みを展開してきた。このことは、今日われわれが直面する諸課題への対応を考える意味でも、何かの指針を与えてくれるに違いないという。

そして、関東大震災から 100 年、この節目の年に、近代における仏教者の災禍・病苦への対応に焦点を当てて、その実態の歴史を紹介するパネル展示を行うことにより、改めて先人たちの苦難のあゆみを知り、思いを寄せるとともに、災禍・病苦にどう取り組むべきかを仏教に学び考える機会になれば、と中西氏は語った。

パネル展示の内容は以下の通りである。

（1）京都療病院の設立（明治 5 年）
（2）感染症対策と仏教教化（明治 10 年代）
（3）講社・施薬院の活動（明治 10・20 年代）
（4）濃尾大地震（明治 24 年）
（5）仏教主義看病婦学校（明治 30 年前後）
（6）仏教系保険会社の設立（明治 30 年前後）
（7）箒川列車転覆事故（明治 32 年）
（8）大日本仏教慈善会財団（明治 34 年）
（9）『仰臥三年』の衝撃（明治 36 年）
（10）東北飢饉と仏教児童施設（明治 38 年）

（11）仏教主義慈善病院①済世病院（明治 42 年）

（12）仏教主義慈善病院②浅草救護所（明治 43 年）

（13）仏教主義慈善病院③早稲田病院（明治 44 年）

（14）関東大震災（大正 12 年）

（15）九條武子とあそか病院開院（昭和 5 年）

（16）室戸台風（昭和 9 年）

❖　**講演会・研究セミナー**　❖

研究セミナー

寺院聖教の調査とその方法
―真宗・仏教研究者が古写本を活用するために―

2023 年 7 月 19 日（水）17:00～18:30
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室

野呂靖氏の発表の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 7 月 19 日（水）、野呂靖氏（龍谷大学准教授）より「寺院聖教の調査とその方法—真宗・仏教研究者が古写本を活用するために—」と題した講演会が開催された。資料のデジタル化が進む現代、実物の資料を調査することにどのような意義があるのだろうか。長年、資料調査に携わってきた経験をもとに、野呂氏から具体的な調査方法をはじめ、寺院に所蔵された資料群である「聖教」研究の未来が語られた。

講 演 者：野呂 靖 氏（龍谷大学准教授）

野呂 氏

資料について「何が」書いてあるかに注目が集まりがちであるが、「何に」書かれているのかということも重要であり、資料調査によって明らかになる装丁や紙の種類といった本文以外の情報から実に多くのことが見えてくるという。たとえば紙を削って行われた修正箇所は実物に触れることではじめてわかり、それによって資料の成立過程が見えてくる。一

つの資料が完成されるまでには複雑なプロセスがある。資料調査はそのプロセスを解明し、一つの寺院に集積された「聖教」の全体像を把握することを可能にする。

また調査時の持ち物や服装、資料の扱い方などの具体的な方法についてもレクチャーされ、資料や資料を保存する寺院に対する研究者の適切な向き合い方が語られた。

講演後、フロアから、資料調査と資料のデジタル化の未来について話題があがった。資料のデジタル化によって誰もが資料にアクセスできるようになる。そうして社会的な関心を呼ぶことで、資料を守り繋ごうという意識が高まる。デジタル化もまた重要な動きであると、野呂氏は語った。

寺院に所蔵された資料を閲覧することは、同時に資料を傷めることでもある。適切な方法で、そして敬意をもって資料を調査し、「聖教」を次代へ継承していくことが研究者の役割である。本講演会を通して、資料に対する研究者の姿勢が示された。

記念写真

❖ 講演会・研究セミナー ❖

明治・大正期の龍谷大学関係雑誌

酒生慧眼と高輪仏教大学歴史部の設置構想

2023 年 7 月 19 日（水）17:15～18:45
オンライン開催（Google Meet）

酒生慧眼（１８６５～１９１０）福井市本願寺派浄福寺に生まれる。明治18年普通教校入学、23年文学寮卒業、第二高等中学校（仙台）を経て、帝国大学（東京大学）進学、31年に卒業した。卒業後、文学寮教授・仏教高等中学を経て、35年に高輪仏教大学学長に就任し、同大学に歴史部の設置を構想したが、眼病ため翌年辞任。37年から私立大阪商業学校（現大商学園高等学校）校長に就任、同校の発展に貢献し、同校中興の祖と称せられた。

主　催：龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC）
仏教史・真宗史総合研究班 代表　文学部歴史学科 中西直樹

酒生慧眼のプロフィール

❖　概　　要　❖

2023 年 7 月 19 日（水）、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門の常設研究班「仏教史・真宗史総合研究班」（代表：文学部歴史学科　中西 直樹教授）主催、明治・大正期の龍谷大学関係雑誌に関する研究セミナー「酒生慧眼と高輪仏教大学歴史部の設置構想」をオンライン形式で開催した。司会は近藤俊太郎氏（龍谷大学非常勤講師）が担当した。

講 演 者：中西 直樹 氏（龍谷大学教授）

中西 氏

中西氏によると、1900 年前後は、近代的仏教史研究の黎明期とも言うべき時期であり、同じ頃に真宗本願寺派の設置する高輪仏教大学では、歴史部設置の構想も進められていた。そして、その構想の中心にいたのが、高輪仏教大学の初代学長・酒生慧眼であった。構想は実現には至らず、その事実もほとんど知られていないが、仏教史学専修の高等教育・研究機関をいち早く設置しようとした点は、注目に値すべきものであったという。

中西氏はこのセミナーにおいて、酒生慧眼の人となり及びその歴史部設置の構想について、彼の略年譜を参照しつつ、まずその修学時代の人間関係（普通教校・文学寮時代の学友）と活躍ぶりを紹介した。同じく福井県出身の関係者が数多くいたことが印象的である。ついで、「仏教史学研究必要論の提唱」「中央商業学校・高輪仏教大学の設立」「高輪仏教大学歴

史部の設立構想」「高輪仏教大学廃止と本山の処分」「大阪商業学校長時代」といった方面から、当時の人間関係が実際にどの程度の影響力があって、どのような権力関係が存在していたのかを想像させるのに非常に重要な、単純に達令類や論説だけでは読み取りにくいところの情報を提示しつつ、酒生慧眼の生涯の活動を追跡し、その功績を論じた。

❖ コロキアム ❖

コロキアム

Admonitions from Ishiyama: A Reappraisal of Rennyo and the Reception and Role of Sacred Teachings Documents in the History of Shin Buddhism

2023 年 7 月 21 日（金）17:00～18:30
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室／オンライン開催（Zoom）

George Keyworth 氏

❖ 概　　要 ❖

2023 年 7 月 21 日（金）に、龍谷大学大宮キャンパスでは、George Keyworth 氏（サスカチュワン大学准教授）によるコロキアムが行われた。コロキアムのテーマは “Admonitions from Ishiyama: A Reappraisal of Rennyo and the Reception and Role of Sacred Teachings Documents in the History of Shin Buddhism”（「石山からの戒め：真宗史における蓮如と聖教の受容及び役割の再評価に向けて」）であった。司会・進行は、本学教授の嵩 満也氏が担当した。本コロキアムの概要は以下の通りである。

講 演 者：George Keyworth 氏（サスカチュワン大学准教授）

Keyworth 氏は、日本と中国の中世仏教を専門とし、今回は浄土真宗本願寺派で中興の祖とも称される蓮如を取り上げながら、中世日本における「聖教」の概念を中心に講演した。氏はまず、「聖教」（仏教における聖なる教え・文献）の定義とその重要性について紹介し、東アジア地域、特に中国仏教における聖教の重要な地位について説明した。次に日本における聖教概念に由来について触れつつ、法然、親鸞、蓮如の残したテキストに見る「聖教」の具体的な事例を取り上げ、最後にそうした原典が翻訳された時、「聖教」はいかに翻訳されたのかについて説明した。

Keyworth 氏

「親鸞聖人」と「蓮如上人」の言葉では、「聖」と「上」の字は異なるものの、その発音は同じであり、こうした違いは「聖教」の概念を理解する上でいかに役に立つのか。あるいは、真宗の重要な経典である『歎異抄』にある「聖教」という言葉は、英訳では sacred texts, valuable texts などと翻訳されている（仏教伝道協会訳、1996 年）が、このようなキーワードの正しい翻訳は、真宗の伝統における「聖教」の概念を理解するためになぜ重要なのか。

嵩 氏（司会）

仏教では指導者によって「聖教」の概念が様々であり、真宗でも親鸞および蓮如による「聖教」の使い方は異なる。蓮如にとって「聖教」は、伝統的な尊い教えも含意し、一般的な経典や仏教テキストだけではないことを意味している。言い換えれば、蓮如は伝授さ

質疑応答の様子

れた特定の教えに従う必要性を強調し、このような教えを誤読したり誤解したりすること

を警告しているのである。その意味では、蓮如にとって「聖教」とは、経典や正典と同じことではなく、伝授された重要な教えを含む特定の経典を指すものであると主張した。最後に Keyworth 氏は、「聖教」概念の正しい理解は、真宗独特の伝統とその重要性を理解するための鍵であると結論付けた。

講演の後、現地およびオンライン参加者から多岐にわたる質疑と議論が交わされ、盛況のうちに終了を迎えた。

❖　講演会・研究セミナー　❖

講演会

蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？
――蝙蝠、仏教と東アジア宗教

2023 年 7 月 24 日（月）15:15～16:45
龍谷大学大宮学舎　西黌２階大会議室

入澤 氏（コメンテーター）、能仁 氏（司会）

❖ 概　　要 ❖

2023 年 7 月 24 日（月）、龍谷大学世界仏教文化研究センター・龍谷大学仏教学会・龍谷学会主催、ハーバード大学の James Robson（ジェームズ・ロブソン）教授より「蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？――蝙蝠、仏教と東アジア宗教」と題した講演会が開催された。司会は、本学教授の能仁正顕氏が担当した。

以下ジェームズ・ロブソン先生の講演内容を要約する。

講 演 者：James Robson 氏（ハーバード大学教授・ハーバード大学アジアセンター所長）

James Robson 氏

講演は、ジェームズ・ロブソン氏がコロナ禍中、自宅の裏庭に飛び交う蝙蝠を目撃した経験譚から始められ、仏教と動物との関係を考える中で、仏教典籍における鳥鼠比丘のイメージに関心が湧いたと語られた。

中村元『広説仏教語大辞典』によると、鳥鼠はコウモリ（蝙蝠）の異名であり、鳥鼠比丘は破戒の比丘にたとえるという。なぜ蝙蝠と破戒比丘とが結び付けられたのかと、辞典の解釈に不審を覚えたジェームズ・ロブソン氏は、古今東西における蝙蝠のイメージを調査する

ことにした。

蝙蝠は、西洋文化、特に中世ヨーロッパの写本資料において、悪魔的な姿で描かれ、ネガティブなイメージが主であった。一方、中国の文化や民間伝承では、蝙蝠の「蝙」は幸福の「福」と発音が同じであることから、逆さまにぶら下がる蝙蝠の姿にかたどり、「倒蝠（逆さまのコウモリ）」→「到福（福がやって来る）」へと、幸運や長寿が連想される。他にも、刺繍や陶磁器などで五匹の蝙蝠をもって「五福」というめでたい言葉を表したり、仙人の鍾馗・李鉄拐の画像に蝙蝠がしばしばみられたりする。この積極的、ポジティブなイメージは韓国や日本にも伝わったと、ジェームズ・ロブソン氏が語った。

ところで、仏教典籍においては、玄奘『大唐西域記』巻二（大正五一・八八二上）には、洞窟に棲息する五百匹の蝙蝠が、旅人の誦する法音（阿毘達磨蔵）を聴聞するために焼かれて死んで人間と生まれ変わり、修行して聖賢となった話が収めている。このように、蝙蝠はインドの仏道修行者にとってかなり身近の存在であったから、さまざまな仏教の譬喩に利用されただろうと、ジェームズ・ロブソン氏が指摘した。

鳩摩羅什訳『仏蔵経』巻上（大正一五・七八八下）に「舎利弗、譬如蝙蝠欲捕鳥時則入穴為鼠、欲捕鼠時則飛空為鳥。而実無有大鳥之用、其身臭穢但楽闇冥。舎利弗、破戒比丘亦復如是」と、破戒比丘を蝙蝠に準える。ここを根拠として、「鳥鼠比丘」の喩えが広く知られるようになり、中国では道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』巻二、日本では無住『沙石集』（梵舜本）巻四第一話などに用例がみられ、イソップ寓話にも類話が確認できるという。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

国文学研究資料館における古典籍のデジタル化と公開
―大規模フロンティア事業の達成と展望―

2023 年 8 月 29 日（火）14:00～15:40
龍谷大学大宮学舎　東黌 301 教室

会場の様子

❖　概　　要　❖

2023 年 8 月 29 日（火）、入口敦志氏（国文学研究資料館 教授）をお招きし、学術講演会を開催した。講題は、「国文学研究資料館における古典籍のデジタル化と公開―大規模フロンティア事業の達成と展望―」。なお、この講演会は、当センター基礎研究部門 古典籍資料総合研究班の研究活動（「龍谷大学大宮図書館所蔵近世勧化本選集の作成をめざす研究」）の一環で、近年急速に変化しつつある研究環境の変化について正確な知見を得ることを目的とするものである。当日は、和田恭幸氏（龍谷大学教授）の司会のもと、講演に続き、活発な意見交換が行われた。

講 演 者：入口 敦志 氏（国文学研究資料館教授）

入口 氏

入口氏は、メディア転換の歴史から説き起こし、国文学研究資料館が推進する大規模フロンティア事業の目的と経緯、学術研究における意義について解説された。梗概は以下のとおりである。

かつて、中国を中心とした東アジア漢字文化圏では、簡牘から紙へ（第 1 次）、写本から

刊本へ（第１.５次）と、メディアの転換がおこった。そして、現今、私たちの生活環境でおこっている紙から電子データへの転換は、いわば第２次メディア転換に相当する。

中国では、第１次メディア転換に際して、記録媒体が簡牘から紙へと単純に置き換わっただけでなく、国家による大規模な事業、すなわち類書や叢書、そして大蔵経の編纂が行われた。そして、現今の第２次メディア転換においては、「文淵閣四庫全書電子版」「中国基本古籍庫」など、全文検索機能が搭載された電子データベースが開発されるなど、素早い対応を講じることができた。

一方、日本は第１次メディア転換を経験しておらず、国家による大規模な典籍の集積・編纂事業もほとんど行われてこなかった。それは現在日本の古典籍デジタル化への対応にも影響が及んでいる。

さて、現在、日本国内では、国立国会図書館や早稲田大学などが、かなり早い時期から古典籍のデジタル画像公開を推進しており、利用する際の利便性もどんどん高まっている。また、画像公開については、国文学研究資料館もその一翼を担っているが、仏教関係典籍については、これからの課題となるもののようである。さらに、電子テキスト化については、欧米や中国に比べて大幅に遅れているといわざるをえない。日本語表記の複雑さなど、解決すべき様々な障壁があるものの、今後の大規模学術フロンティア事業において実現する必要がある。

当日の講演では、国文学研究資料館が 2014 年度から 2023 年度にかけて実施してきた「日本語の歴史的典籍の国際共同ネットワーク構築計画」の内容・成果と波及効果、および後継計画を紹介し、講演を締めくくった。

❖　講演会・研究セミナー　❖

第５回 日中チベット学ワークショップ

チベットの医学と仏教
―歴史・思想・文化―

2023 年 9 月 14 日（木）9:15～12:00
龍谷大学大宮学舎 西黌 2 階大会議室

中国蔵学研究センター来訪団一行

❖ 概　　要 ❖

2023 年 9 月 14 日（木）、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 大蔵経総合研究班主催、中国蔵学研究センター・龍谷学会共催の、第五回日中チベット学ワークショップ「チベットの医学と仏教―歴史・思想・文献―」を開催した。

能仁 氏、三谷 氏、廉 氏

中国蔵学研究センターと龍谷大学との間では、これまでチベット学、特に仏教を中心とした研究分野において相互の交流を重ね、2011 年には共同研究と学術交流に関する協定を結び、今日に至る。2017 年に世界仏教文化研究センターの開設を記念して、本学で国際シンポジウム「チベットの宗教文化と梵文写本研究」を開催し、多数の研究者が集った。

今回のワークショップは、2019 年以来、コロナ禍でしばらく延期されていた研究交流が、四年ぶりに再開することとなる。まず、能仁正顕氏（龍谷大学文学部教授）により開会の辞および趣旨説明、三谷真澄氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター基礎研究部門長・文学部教授）により歓迎の辞が述べられた後、訪問団の代表として廉湘民氏（中国蔵学研究センター副センター長）より挨拶を頂戴した。続いて、仏教経典研究・チベット医学という二つの面から、五名の研究者による研究発表が行われ、最後に、岩尾一史氏（龍谷大学文学部准教授）による閉会の辞をもって締めくくった。

このワークショップは、二つの研究グループが展開するだけではなく、研究内容を報告し合い、研究交流をするという意味では、非常に重要な研究の場である。以下、二部に分けて、

各研究発表の梗概を記す。

講 演 者：淺井 教祥 氏（龍谷大学大学院）
北山 祐誓 氏（龍谷大学非常勤講師）

淺井 氏、北山 氏

前半はチベット仏教に関するものである。まず、淺井教祥氏（龍谷大学大学院）より「ツォンカパの『大乗荘厳経論』における幻喩の解釈」と題して、チベットにおける著名な学僧であるツォンカパ ཙོང་ཁ་པ་བློ་བཟང་གྲགས་ (1357～1419) の主著、『了義未了義善説神髄 དྲང་ངེས་ལེགས་བཤད་སྙིང་པོ་』にあらわされた仏教解釈について発表された。この著はチベット仏教における唯識思想理解を示す重要な典籍と位置付けられている。淺井氏はインドの大乗論書である『大乗荘厳経論』の第XI章に説かれる幻の譬喩について、著作中でツォンカパが瑜伽行唯識学派の立場に基づいた解釈を示していることを明らかにした。

続いて、北山祐誓氏（龍谷大学非常勤講師）より「『中辺分別論釈疏』再校訂に関する試論—第I章「相品」を中心に—」と題して、チベット訳に基づいたサンスクリット校訂作業について、実例を示しながら発表が行われた。北山氏は唯識教義をあらわした『中辺分別論』の注釈書の一つである『中辺分別論釈疏』におけるサンスクリット写本の欠損箇所を取り上げ、チベット訳の電子テキストデータベースを駆使することによって、より精度の高いオリジナル写本の復元が可能になることを示した。

インドにおいて制作された仏教テキストはチベットにわたり、チベット語に訳出され、また学僧らによって新たな解釈がなされていった。チベットにおける仏教展開は、さかのぼっ

てインドにおける仏教にも新たな知見を与えるものでもある。両者によってチベットを起点に明らかとなる広大な仏教展開の一端が示された。

講 演 者：仲格嘉 氏（中国蔵学研究センター北京藏医院・研究員）
羅布扎西 氏（中国蔵学研究センター医薬研究所・研究員）
次旺邊覺 氏（中国蔵学研究センター科研オフィス国際処・副処長）

仲格嘉 氏、羅布扎西 氏、次旺邊覺 氏

後半はチベット医学、特に名高い『四部医典 རྒྱུད་བཞི།』という 8 世紀末成立の医学百科全書に関するものである。まず、仲格嘉氏（中国蔵学研究センター北京藏医院・研究員）は、「チベット医薬の理論と実践（藏医理论与实践）」と題し、医者としての視座から、三八六〇余年の歴史を有するとされるチベット医学の基礎理論と臨床実践を、『四部医典』の内容を図解したタンカを用いて紹介した。主に「生理病理树（人体生理と病理の樹）」や「藏医胚胎学图谱（人間が受胎から出産至るまでの様子を図示したもの）」という二枚のタンカを通じて、チベット医学理論の中核たる三因説（隆・培根・赤巴）を説明した後、それが五源（土・水・火・風・空）や三毒（貪・瞋・痴）、また寒暖と関係することを述べた。最後に「诊断树（診断の樹）」「治疗树（治療の樹）」という二枚のタンカを通じて、チベット医学の診断方法と治療方法を概説した。

続いて、羅布扎西氏（中国蔵学研究センター医薬研究所・研究員）は、「清代北京におけるチベット医薬の伝播と発展について（浅谈藏医药在清代北京的传播与发展）」と題して、「曼巴扎仓 སྨན་པ་གྲྭ་ཚང་།（チベット寺院の中の医学院）」の設立、および木版『四部医典』の刊行という二つの面から考察を行った。まず「曼巴扎仓 སྨན་པ་གྲྭ་ཚང་།」は、チベット医学の教育機構

でとある同時に、教学・研究・医療・製薬といった機能も集約されている。雍和宮は代表的な事例である。そこでは、チベット医学のほか、チベットの仏教や天文暦算なども教授されていた。一方、木版『四部医典』については、二十種類が知られているうち、北京で刊行したのは一つしかない（すなわち普寧寺 ཀུན་ཏུ་བཟང་གླིང། 版）とされてきたが、新しい版本（すなわち嵩祝寺蔵蒙印経院 རྒྱང་ཁྲ་ཞེའི་བོད་མོང་ཚོགས་ཀྱི་པར་ཁང། で刊行した嵩祝寺版）が見つかったという。嵩祝寺版は、いままで普寧寺版と同一視されてきたが、その跋文の内容や、普寧寺版の誤字を訂正しているところから考えると、もうひとつの北京版『四部医典』と看做してよいとする。

最後に、次旺邊覺氏（中国蔵学研究センター科研オフィス国際処・副処長）は、「木刻版の『四部医典』について（《四部医典》木刻本研究）」と題して、木版『四部医典』の諸版本のうち、山南扎塘版 གྲ་ཕང་པར་མ། をはじめとする八本の比較研究をおこなった。結論から言うと、扎塘版『四部医典』はチベット歴史上最初の版本であり、多くの版本の底本として活用されていたことが明らかになった。諸本のうち、阿里宗嘎版 རྩང་དཀར་པར་མ། や日喀則達旦版 རྒྱ་བཏན་པར་མ། を除けば、すべて扎塘版、あるいはそれを底本とした版が底本となっている。また、『四部医典』には木版画の挿絵が大量に入っているのは、仏教の中国本土化に起因するという。木版印刷技術の発展に伴い、木版『四部医典』には実用価値はもとより、文化芸術価値をも持つようになった。さらに、「书头符 ཡིག་མགོ（文章の頭に用いる符号）」が木版の年代を判定する一つの基準であるが、普寧寺版における「书头符」が規範的ではなく、チベット語の書写間違いも見られるところからして、普寧寺版は現地の職人が模刻した可能性があるという。

記念写真

❖ 講演会・研究セミナー ❖

研究セミナー

妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究
―流支訳より見たる法華論の変遷について―

2023 年 11 月 29 日（水）15:15～16:45

龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室

会場の様子

❖　概　　要　❖

2023 年 11 月 29 日（水）、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」主催、身延山大学の金炳坤教授より、「妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究―流支訳より見たる法華論の変遷について―」と題して研究報告が行われた。趣旨説明・司会は上野隆平氏（龍谷大学講師）、コメンテーターは辻本俊郎（龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員）が担当した。

講 演 者：金 炳坤 氏（身延山大学教授）

金 氏

金氏は、「法華教学史上における法華論の位置づけ」「和刻本『法華論』の展開」「八世紀以前の流布本、菩提流支訳『妙法蓮華経優波提舎』」「浅野学「興聖寺一切経本『妙法蓮華経優波提舎』について」に対する岡本一平氏のコメント」「「摩提主訳流支重訂説」の検証」といった内容から、『妙法蓮華経優波提舎（法華論）』の三訳九本の系統を整理し、諸本の層位関係及び関係性を分析した。最後に「子注」という形式に着目して、円弘注『妙法蓮華経論子注』（称名寺所蔵）の資料的価値を評価し、講演を締めくくった。

記念写真

❖　講演会・研究セミナー　❖

国際研究セミナー

仏教におけるモノツクリの文化遺産
——四天王寺の技芸文化をめぐって

2023 年 12 月 22 日（木）13:30～15:00
龍谷大学大宮学舎 本館 2 階講堂

講演会の様子

❖ 概　　要 ❖

2023 年 12 月 22 日（金）、「仏教におけるモノツクリの文化遺産－四天王寺の技芸文化をめぐって」と題して国際研究セミナーを開催した。ファビオ・ランベッリ氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部教授）と、エレン・ヴァンフーテム氏（九州大学准教授）より、日本の仏教文化を多面的な視野から考察した講演が行われた。

講 演 者：ファビオ・ランベッリ 氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）
エレン・ヴァンフーテム 氏（九州大学准教授）

阿部 氏（コーディネーター）

始めに、コーディネーターを勤めた阿部泰郎氏（龍谷大学教授・世界仏教文化研究センター兼任研究員）より、仏教が寺院や仏像を始め、あらゆる文化創造の母胎として働きつづける姿を国際的に展望する、という今回のセミナーの開催目的が語られた。

まずファビオ・ランベッリ氏より“Buddhism, Labor, and Traditional Professions: Some General

Consideration”（「仏教、労働、伝統職能――総合的な考察の試み」）と題して講演が行われた。仏教は教義や儀礼という視点から考察されてきたが、ファビオ氏は仏教を大きな文化システムとして見ることを提唱している。何かを作り出す物質的な労働、聖なる共同体であるサンガの運営、職人たちのさまざまな技芸など、そのシステムの中には実に多様な労働が存在する。この労働が仏教を作り、そして運び、生活文化を生み出してきたのである。その労働が生み出すさまざまなモノ（object）にも仏教的な意味が見出された。そして、そのようなモノを生み出す労働、すなわち仏教のために働くことで労働者たちは功徳を得た。このようにして仏教という文化システムの中で、あらゆる事柄に対して仏教的な意味が付与されていったのである。

ファビオ・ランベッリ 氏

ファビオ氏は一例として仏像の制作過程を挙げた。仏像の制作とは、ただ像を作る過程だけではなく、寄付をする者や原材料の調達を行う者、マーケティング、製作後の修復など、さまざまな職人と、彼らの技芸がその過程に含まれているのである。これらの労働は仏教的に見ると、すべてつながっているのである。

またファビオ氏は儀礼について、そこにある秘密性についても言及した。「鴨胸板反りの秘事」を例に挙げ、職人たちの間だけで共有・継承されていた技芸そのものに聖なるものとしての一面が見られるという。儀礼とは、あの世とこの世をつなぐ大きな役割を果たすが、

職人たちの労働に宗教的な側面が見出されるのである。

仏教的なモノや知識をいったい誰が伝えてきたのだろうか。その記録は残されていないが、実にさまざまな人たちが運んできたのだろう、とファビオ氏は語った。仏教が地域化される以前の、地域性を超えた共通システムを見ることができれば、さまざまな生きた仏教の形を復元できるのではないだろうか。まさに仏教文化を世界的な視野をもって眺めるという氏の提案が、講演を通して示された。

エレン・ヴァンフーテム 氏

続いてエレン・ヴァンフーテム氏より“The Construction of Temples and Government Buildings in the Eight Century”（「8 世紀における仏教寺院と政府関係建築の建設」）と題して講演が行われた。エレン氏が専門とする古代の宮殿造営と運営システムについて、建築様式や木簡といったさまざまな点からの考察が語られた。

日本に仏教が伝播する 6 世紀以前、日本の建築様式は茅葺き屋根など実に多様なものであった。仏教とともに中国的建築様式が伝えられると、その影響を受けた建築が登場し始めた。また都の移動にともなって、宮殿の造営は根本的に変化していったのである。奈良時代には巨大な政府の造営システムが構築され、さまざまな部署に分かれて宮殿や建築の造営が行われるようになった。また建築の細部に注目すれば、たとえば同じ瓦が再利用されているという点から、複数の寺院が同時並行で造られていたことが見えてくる。建築の様式の変化、多くの人間が携わる大きなシステム、そして建築物のごく一部にいたるまで、当時の宮

殿造営のようすを知る手掛かりとなるのである。

またエレン氏は、宮殿造営に地方の人々が関わっていたが、特に注目すべき地域が飛騨であると述べた。賦役令として、飛騨国から決められた数の職人（匠丁）を税として納めることを求めたという記録が残っている。また彼らは貴賤を問わずに集められていた。高い技術力を持っていた彼らは「飛騨の匠」という伝説として、『万葉集』や葛飾北斎の絵にも伝えられている。

古代の宮殿造営システムは、実にさまざまな人々が関わり、多くの部門を抱えて複雑に構築されていた。そのシステムを知るために瓦や木簡といった資料も重要である、と語られた。また、そのシステムは中心部だけでなく、その周辺の地域も巻き込んだものであった。「飛騨の匠」はそれをよく示す事例と言えるだろう。エレン氏によって、さまざまな視点から古代の仏教寺院と国家的な宮殿造営について立体的に示された。

三谷 氏（コメンテーター）

講演後、コメンテーターである三谷真澄氏（龍谷大学教授・世界仏教文化研究センター基礎研究部門長）より、儀礼空間の創出という点からコメントがなされた。三谷氏は宗教儀礼には「帰依としての儀礼」と「機縁としての儀礼」があり、双方ともその儀礼をおこなう「場」としての宗教儀礼空間が必要であり、それを創出するのが職能集団であると述べた。また、それらの職能集団は現代にも生きていることを、具体例をもって示した。寺院のような宗教

空間は職能集団や、さまざまな労働によって作り出されている。儀礼を行うためには、まずその空間を創出することが重要であると感じられた講演であったと三谷氏より語られ、本セミナーは締め括られた。

記念写真

❖　講演会・研究セミナー　❖

調査報告会

石山寺所蔵『浄土論』調査報告
—『浄土論』諸本との関係を中心に—

2024 年 1 月 20 日（土）15:30～17:00
龍谷大学大宮学舎 西黌２階大会議室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2024 年 1 月 20 日（土）、「石山寺所蔵『浄土論』調査報告—『浄土論』諸本との関係を中心に—」と題して、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」プロジェクトの調査結果について、辻本俊郎氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員）より報告された。

講 演 者：辻本 俊郎 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員）

まず司会の都河陽介氏（龍谷大学講師）より本報告会の趣旨が説明された。本プロジェクトは世界仏教文化研究センターの基礎研究部門特定公募研究に採択されたものである。浄土真宗において重視される、親鸞以前の教理史を伝える「七祖聖教」について、それら文献が形成された時点での姿を、テキストクリティークを通して探り、より厳密に文献を理解することを目的としている。特に世親『浄土論』に焦点を当て、校訂テキストおよび訳注の作成を行ってきたが、作成にあたっては多様な写本を回収する作業が必要不可欠であったという。中でも日本の寺院に所蔵されている古写本は重要であり、その中から石山寺に所蔵される『浄土論』が取り上げられた。

辻本 氏

報告の冒頭では、辻本氏から『浄土論』研究に関わるようになった経緯について、学生時代の思い出とともに語られた。師の指導のもとで、複数の版本をコピーし、ハサミとノリで切り貼りして対照させ、異なる部分にマーカーを引いてみると、たくさんの相違点があることに気がついたという。たとえば『浄土論』の『論註』について親鸞加点本と高麗版を対照させてみると、驚くべきことに 200 箇所近くの相違が確認される。本報告会の中では、二つの文字の間での入れ替わりや、改行の位置といった多岐にわたる相違点が、豊富な具体例をもって示された。

そして石山寺での古写本に関する調査結果が報告された。古写本は形式が巻子本から折本へと修正された形跡が見られ、そのせいか半端に文が切られ、「校了」と記されていた。また古写本と初版本の対照作業について、計 23 もの具体例とともに報告された。辻本氏は石山寺の古写本について、氏が分類した世親『浄土論』テキストの八つの系統のどこにも当てはまらず、さまざまな系統が混じり合ったものであると語った。この古写本は『浄土論』と『論註』の折衷型と言うことができ、新たな分類を立てるべき全く新しいものであると指摘した。さらに中国や韓国における『浄土論』からの引用を見ても、この古写本に合致するものが見当たらない。石山寺の古写本はいったい何を参照して作成されたものなのか、という大きな問題も浮上した。

辻本氏からの報告後、フロアとの質疑応答がおこなわれた。石山寺の古写本の制作背景が不明であるがゆえに、さまざまな事態を想定する余地が残されている。氏の精緻な分析に質問が寄せられ、『浄土論』テキストに関する理解が深められた。また、氏とフロアの間で、制作背景が明らかでない石山寺の古写本に関して多くの可能性が飛び交い、未知のテキストについて想像が広げられた。題を同じくするテキストが書写され、伝えられていく中でさまざまな相違点が生まれた。本報告会では、その伝播過程に見られる、あるいは想定される歴史的意義について活発な議論がおこなわれた。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

荘厳経論と大乗荘厳経論

2024 年 2 月 16 日(金)15:15～17:00
龍谷大学大宮学舎 北黌 202 教室

会場の様子

❖　概　　要　❖

2024 年 2 月 16 日（金）、松田和信氏（佛教大学教授）より「荘厳経論と大乗荘厳経論」と題して講演が行われた。松田氏は近年、『荘厳経論』（*Sūtrālaṃkāra*）の研究に精力的に取り組んでいる。『荘厳経論』は紀元 1-2 世紀に活躍したアシュヴァゴーシャ（Aśvaghoṣa, 馬鳴）によって著されたものであるが、テキストは現存しておらず、その存在もほとんど知られていなかった。講演会では明らかになりつつある『荘厳経論』について、タイトルを同じくする『大乗荘厳経論』（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*）と合わせて語られた。

講 演 者：松田 和信 氏（佛教大学教授）

松田 氏

『荘厳経論』はカーヴィヤ調の韻文で著された阿含経典注釈あるいは解釈論であったと推測される。『荘厳経論』のテキストは現存しないが、*Sūtrālaṃkāra* という名前が韻律書に現れる例や、「アシュヴァゴーシャの荘厳経論」からと明記された引用偈の例が確認されている。人口に膾炙した存在であるアシュヴァゴーシャ作品は仏教内外を問わず強い影響力を持ち、彼の偈が広く知れわたっていたと考えられるという。

また sūtrālaṃkāra という語は瑜伽論摂決択分の写本において、「如来によって説かれた諸経典の意味を如実に開示する」と定義されている。そこで挙げられる五つの比喩は『大乗荘厳経論』の偈にも確認されるものである。松田氏は『大乗荘厳経論』の作者について、先行研究にならって弥勒・無著・世親の三者であるとの立場を取るが、その三者は摂決択分に示される作者・解説者・造論者という三者にそれぞれ該当するのではないか、と述べた。摂決択分における sūtrālaṃkāra はテキストの名前ではなく、先に示した定義を示す概念として用いられていた可能性が高い。そしてその定義は、松田氏が示してきた『荘厳経論』からの引用例に完全に合致すると語った。

松田氏は「同じタイトルの論書が全く無関係に存在する」ことは考えにくく、両者には後行するものの先行するものに対する模倣が見られるだろう、と語った。『荘厳経論』と『大乗荘厳経論』には論述スタイルに類似点が見られ、後行する『大乗荘厳経論』は先行する『荘厳経論』の影響を受けていた可能性がある。『荘厳経論』が『大乗荘厳経論』の前提にあるとすれば、『大乗荘厳経論』というタイトルには「大乗の荘厳経論」という意味が見えてくるという。

松田氏は『荘厳経論』からと思われるアシュヴァゴーシャの偈は試作技術が高く、どれも美しいものであると述べ、未発表の偈を紹介して講演を締め括った。講演後は、『荘厳経論』と『大乗荘厳経論』の関係から見えてくるであろうという新たな知見について、フロアと活発な議論が行われた。

記念写真

❖ 講演会・研究セミナー ❖

2022 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会

The Portuguese Discovery of Buddhism and the Changing Identity of a Sri Lankan Tooth Relic

2024 年 2 月 20 日（火）13:30～15:00

龍谷大学大宮学舎 西黌 2 階大会議室／オンライン開催（Zoom）

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2024 年 2 月 20 日（火）に、龍谷大学大宮キャンパスにおいて、2023 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞の受賞者であるジョン S.ストロング氏（Dr. John S. Strong、チャールズ A.ダナ教授、ベイツ大学）による受賞記念講演会が行われた。講題は “The Portuguese Discovery of Buddhism and the Changing Identity of a Sri Lankan Tooth Relic” （「ポルトガル人による仏教の発見と変化するスリランカ仏歯のアイデンティティ」）であった。

講 演 者：John Strong 氏（ベイツ大学名誉教授）

ストロング 氏

ストロング氏は、西洋のキリスト教徒であった初期ポルトガル植民者たちが、16 世紀初頭にスリランカの仏牙舎利とどのように遭遇し、いかなる態度を持ったのか、そしてそうした態度がどのように変遷したのかについて講演した。司会・進行は本学教授の那須英勝氏が担当した。以下、本講演会で話された概略である。

1560 年、ポルトガル人がスリランカのジャフナにあった釈迦の歯とされた仏舎利を略奪した。後に植民地の副王であったドン・コンスタンチノは、この歯を戦利品として売り出そうとするが、結局のところカトリック教会の圧力によって実現できなかった。カトリッ

ク教会は、その歯が偶像（悪魔の歯）であるとして破壊を命じた。ところが、破壊されて終わるはずの仏舎利の物語は意外な展開を見せる。この歯は時にはサルの歯として、時にはインドの猿神であるハヌマーンの歯として、あるいは仏陀の遺物として生き続けるのである。

ストロング氏は、こうした様相を「異なるアイデンティティー」と名付ける。たとえ物質として破壊されても、仏陀の遺物として意味を持って時に姿を変えて生き続ける仏舎利の物語は、ポルトガル人が仏教についてより明確な理解にいたる道筋を示したという。

那須 氏（司会）

ところで、このような物語が誕生したのは 16 世紀が初めてではない。注意されるのは、13 世紀頃から伝わるスリランカの物語「歯の年代記」である。これによれば、仏牙舎利がスリランカに届く前に、非仏教徒であったインドのパンドゥ王によって略奪されたという。そして、パンドゥ王が仏牙舎利を破壊しようと火の中に投げ入れ、鉄床においてハンマーを打ち付けたにもかかわらず、なお壊れなかったという。そこで今度は仏牙舎利を地面に埋めて象に踏ませたところ、蓮の花が咲き、中から仏牙舎利が現れたという。

つまり、ポルトガル副王のドン・コンスタンチノによる行為—仏牙舎利を焼いたり、叩き壊したり、水にしずめたりすることなど—は、既にパンドゥ王によって試されていたのである。仏教では、真の仏舎利は破壊できないものとされる。それを強く信じるのがスリランカ人である。このためスリランカ人は、ポルトガル人が「仏陀の歯」を破壊したという話を聞いても信じようとしない。なぜなら「仏陀の歯」を破壊する試みは既にインドで行われており、成功しなかったからである。

本講演会は終始にわたり広い見地から質疑や議論が交わされ、盛況のうちに終了を迎えた。

質疑応答の様子

❖　講演会・研究セミナー　❖

基礎研究部門　特定公募研究
「大瀛『横超直道金剛錍』の研究」（研究代表：殿内恒）

三業惑乱と香月院深励

2024 年 2 月 20 日（火）17:00～18:30
龍谷大学大宮学舎　北黌 106 教室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2024 年 2 月 20 日、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門特別公募研究「大瀛『横超直道金剛錍』の研究」主催、芹口真結子氏（聖心女子大学現代教養学部史学科 専任講師）より「三業惑乱と香月院深励」と題して研究報告が行われた。司会は、本学法学部の能美潤史准教授が担当した。

講 演 者： 芹口 真結子 氏（聖心女子大学専任講師）

芹口 氏

三業惑乱は近世期最大の全国的異安心事件として真宗史・近世宗教史・近世思想史の諸分野における関心が高く、多くの研究蓄積が存在する。芹口氏は歴史学の面から、報告において三業惑乱の研究史を振り返りつつ、三業惑乱における香月院深励の動向をめぐって、様々な文献から彼が関与したとされる逸話 4 種を紹介した後、深励の自筆書簡から彼の三業帰命説に対する見解や批判についても言及した。

芹口氏によると、4 種類の逸話のいずれも論拠が示されておらず、現時点で歴史的事実と判定することは難しく、特に三業惑乱の審理などに深励が直接関与したとする逸話がなぜ

生成されたのか、検討の余地はある。同時代史料から深励の動向や言説を追うことが重要であり、幕府裁許は、寺社奉行側の審理史料等、政治的手続きに基づいた検討が必要であるという。また、三業帰命説に対する深励の解釈は、三業惑乱の展開過程等により変化した可能性も想定され、加えて東派教団内の（教学の）動向も視野に入れた丁寧な分析が求められる、と芹口氏は今後の課題を展望しつつ、報告を締めくくった。

記念写真

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

仮名草子（合戦物）における宗教的説話について
―『北條五代記』と『嶋原記』を中心に―

2024 年 2 月 21 日（水）15:00～17:00
龍谷大学大宮学舎　東黌 302 教室

会場の様子

❖　概　　要　❖

2024 年 2 月 21 日（水）、位田絵美氏（近畿大学教授）をお招きし、学術講演会を開催した。講題は、「仮名草子（合戦物）における宗教的説話について―『北條五代記』と『嶋原記』を中心に―」。なお、この講演会は、当センター基礎研究部門 古典籍資料総合研究班の研究活動（「龍谷大学大宮図書館所蔵近世勧化本選集の作成をめざす研究」）の一環である。当日は、和田恭幸氏（龍谷大学教授）の司会の下、講演に続き、活発な意見交換が行われた。

講 演 者：位田 絵美 氏（近畿大学教授）

位田 氏

講演は位田氏自身の研究内容の紹介から始まった。仮名草子の挿絵研究を専門とする位田氏は、仮名草子の戦いを中心とした合戦物における宗教的説話の紹介が講演の目的であると語った。『北條五代記』においては（浅草寺の）老鼠の話、『嶋原記』（別名：天草物語）においては御影の話（デウスの像が表具される話）が取り上げられ、この二つの宗教的説話がどのように作品に取り入れられているのかが論じられた。また二作品の改版に際し、削除や付加といった傾向がみられるが、このような行為の目的や意義も検討された。

結論として、仮名草子の合戦物における宗教的説話は、作品の中でどのような役割を果たすかによって、削除されて、挿絵されたりする。また、同一タイトルの仮名草子が改版時に、世論を反映して、その内容を変化させている、と位田氏は指摘した。

和田 氏（司会）

❖　講演会・研究セミナー　❖

国際研究セミナー

デジタルヒューマニティーズ最前線 2024

2024 年 3 月 1 日（金）10:00～12:30
龍谷大宮学舎 東黌 101 教室

会場の様子

❖ 概　　要 ❖

2024 年 3 月 1 日（金）、龍谷大学世界仏教文化研究センター（RCWBC）基礎研究部門 西域研究班主催、同古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター（DARC）共催、国際研究セミナー「デジタルヒューマニティーズ最前線 2024」を開催した。セミナーでは、イギリス 大英図書館「国際敦煌プログラム（IDP）」、およびモンゴル国立大学から、それぞれ研究者 1 名をお招きし、研究発表会を行なった。司会・進行は西域総合研究班長の三谷真澄氏（龍谷大学教授）、コメンテーターは岡田至弘氏（龍谷大学名誉教授）・松川節氏（大谷大学教授）、英語からの通訳は当センター応用研究部門 博士研究員の Pradhan Charan Gouranga（プラダン・ゴウランガ・チャラン）氏が担当した。

講 演 者：Anastasia Pineschi（アナスタシア・ピネシー）氏（IDP: Project Manager）
Oyunjargal Ochir（オユンチェルガル・オチル）氏（Mongolian National Uniersity）

Pradhan Charan Gouranga 氏、Anastasia Pineschi 氏、Ochir Oyunjargal 氏

まず、現在 IDP でマネージャーを務めるピネシー氏は、「Developing Digital Tools for an Online Audience: Customising and Modernising the IDP Websaite」と題する講演において、2004 年に本学と協定を締結している大英図書館の国際敦煌プロジェクト(IDP)を紹介してから、IDP Web サイトを開いて、そこで公開されている史料の利用方法を実演することによって、

近年実施した IDP Web サイトのリニューアル状況を解説した。

続いて、モンゴル国立大学 歴史学科のオチル准教授は、「清代モンゴル史研究―その地平と展望―」と題する講演において、清代モンゴル史研究の研究史を振り返りつつ、最近の研究動向を紹介した。90 年代以降、中国・モンゴル国の档案史料が続々と公開されることによって、膨大な史料（紙媒体の出版物・デジタルアーカイブも含む）が使用可能となり、従来の事例研究においては、地域・時代の差異や変化をより正確に把握・解明することができるようになった。さらに、従来の研究テーマである政治・行政・宗教に加えて、相続・家族（婚姻・離婚）・ジェンダーなど社会の実像を考察することも研究の射程に入った、という。

また、本研究セミナーと関連して、3 月 2 日（土）には、古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター（DARC）の 2022～2023 年度 2 年間の研究総括として、「古典籍・文化財のデジタルアーカイブが魅せる未来像」をテーマに公開講演会が開催された。当日は、イギリス IDP から 2 名、モンゴルから 1 名、日本から 1 名の専門家を招聘し、各専門領域における最新の研究成果、デジタルアーカイブの展望について講演が行われた。プログラムは、以下のとおりである。

上：Adi Keinan Schoonbaert 氏、Anastasia Pineschi 氏
下：Ayudai Ochir 氏、阿部泰郎氏

講演Ⅰ　IDP のデジタルヒューマニティーズへの貢献と将来的展望（通訳あり）

Anastasia Pineschi　(British Library IDP Project Manager)

Developing Digital Tools for an Online Audience: Customising and Modernising the IDP Website

Adi Keinan-Schoonbaert　(British Library, Digital Curator)

Digital Research and Handwritten Text Recognition at the British Library & Opportunities for IDP

講演Ⅱ　考古学とデジタルアーカイブ――その期待と展望（通訳あり）

Ayudai Ochir　(Japan-Mongol Cooperative Bichees Research Project: Leader)

講演Ⅲ　宗教テクスト文化遺産アーカイブ創成の試み―聖徳太子と慈円をめぐって―

阿部 泰郎　(名古屋大学名誉教授・龍谷大学文学部教授)

併せて、3 月 1 日（金）～3 月 31 日（日）、古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター（DARC)は、大宮キャンパス・東黌 1 階多目的エリアにおいて「パネル発表」（ポスター発表）を実施した。パネルは、2022～2023 年度 2 年間の DARC 研究員の最先端の研究内容を発表するものである。

パネル展示の様子

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2023年度　研究体制

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2023 年度研究体制

❖　センター長　❖

脇田健一　　龍谷大学社会学部・教授

❖　副センター長　❖

杉岡孝紀　　龍谷大学文学部・教授

1）基礎研究部門（教義的・歴史的・文化学的・文献学的研究）

三谷真澄（研究部門長）　　龍谷大学文学部・教授

1. 親鸞浄土教総合研究班
杉岡孝紀（真宗善本典籍研究プロジェクト研究代表者）　　龍谷大学文学部・教授
嵩満也（真宗学研究プロジェクト研究代表者）　　龍谷大学国際学部・教授

井上見淳、井上善幸、岩田真美、内田准心、内手弘太、打本弘祐、葛野洋明、佐々木大悟、高田文英、武田晋、玉木興慈、殿内恒、那須英勝、鍋島直樹、能美潤史、藤能成、森田眞円

2. 西域総合研究班
三谷真澄（研究班長）　　龍谷大学文学部・教授

市川良文、岩井俊平、岩尾一史、岩田朋子、入澤崇、岡本健資、徐光輝、曽我麻佐子、玉井鉄宗、中田裕子、福山泰子、藤原崇人、村岡倫

3. 古典籍資料総合研究班
和田恭幸（研究班長）　　龍谷大学文学部・教授

寺田詩麻、内田智子、余田弘実、千賀由佳、竹内真彦

4. 大蔵経総合研究班
能仁正顕（研究班長）　　龍谷大学文学部・教授

青原令知、阿部泰郎、石川知彦、岩田朋子、大谷由香、楠淳證、野呂靖、長谷川岳史、早島慧、藤丸要、三谷真澄、道元徹心、吉田哲

5. 仏教史・真宗史総合研究班
中西直樹（研究班長）　　龍谷大学文学部・教授

岩田真美、内手弘太

6. 特定公募研究
共同研究：内田准心（研究代表者）、殿内恒（研究代表者）、村岡倫（研究代表者）
個人研究：浅井尚希

7. 研究分野横断的研究プログラム
三谷真澄（国際学術研究プログラム研究代表者）
葛野洋明（応用学術研究プログラム研究代表者）

2）応用研究部門（社会的諸課題への応答・仏教の現代的意義の追求）

鍋島直樹（研究部門長）　龍谷大学文学部・教授
CHSR・センター長

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）

吾勝常行、井上善幸、井上見淳、猪瀬優里、入澤崇、岩田真美、内田准心、内手弘太、打本弘祐、大谷由香、黒川雅代子、葛野洋明、佐々木大悟、清水耕介、杉岡孝紀、高田文英、武田晋、嵩満也、玉木興慈、陳慶昌、殿内恒、中根智子、那須英勝、能美潤史、藤丸要、橋口豊、濱中新吾、原田太津男、水尾文子、森田敬史、森田眞円

3）国際研究部門（国際的な発信と研究者交流）

那須英勝（研究部門長）　龍谷大学文学部・教授

佐野東生、嵩満也、久松英二、古荘匡義

世界仏教文化研究センター博士研究員、リサーチ・アシスタント

博士研究員
崔鵬偉（基礎研究部門）、西村慶哉（応用研究部門）、プラダン・ゴウランガ・チャラン（国際研究部門）

リサーチ・アシスタント
釋大智（応用研究部門）、武宮真如（国際研究部門）、安川真由（基礎研究部門）

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2023 年度研究活動報告書

2024 年 3 月 31 日発行

編　集　　龍谷大学世界仏教文化研究センター

（崔鵬偉、釋大智、武宮真如、西村慶哉、プラダン・ゴウランガ・チャラン、安川真由）

発行者　　龍谷大学世界仏教文化研究センター（代表　センター長　脇田健一）

〒600-8262　京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1　白亜館 3F

電話: 075-343-3812　　E-mail: cswbc@ad.ryukoku.ac.jp

URL: http://rcwbc.ryukoku.ac.jp/

印刷所　　株式会社　河北印刷

RYUKOKU
UNIVERSITY